社団法人　日本植物園協会

平成 23 年度海外事情調査報告書

－中国　湖北省・重慶市・貴州省（2011 年 8 月）－

目　　次

表紙：　メタセコイアのタイプ樹 ” 天下第一杉 ” にて

平成 23 年度中国海外事情調査概要　鈴木三男

平成 23 年度隊員名簿、調査期間、調査行程、調査行動記録

調査日誌　玉木恭介

メタセコイア（*Metasequoia glyptstroboides*）の故郷「天下第一杉」を訪ねて　玉木恭介

武漢植物園、重慶市南山植物園　小幡　晃

中国における植物園・自然保護区管理　大内　匠

中国中部の植物　米倉浩司

湖北・重慶・貴州のアオキ属　東馬哲雄

中国湖北・重慶・貴州で観察した生薬基原植物について　石川　寛

中国の編組製品について　小林和貴

観賞の立場から、武漢・重慶植物園で見た盆景と日本産樹木の展示について　加藤昌一

※『助成　財団法人カメイ社会教育振興財団（仙台市）』
平成 23 年度海外事情調査は、財団法人カメイ社会教育振興財団の助成を受けて実施しました。

2011 年度中国海外事情調査概要

隊長　鈴木三男

さる 8 月 20 日から 9 月 2 日にかけて中国湖北省・重慶市・貴州省の 2 省 1 市にまたがる地域を、日本から絶滅したが中国でなお生き残っている植物群の現地での生育状況調査を目的に訪問した。メンバーは鈴木三男が隊長となり、東京大学大学院理学系研究科附属植物園・東馬哲雄、北里大学薬用植物園・石川寛、森林総合研究所・能城修一、東京都公園協会（元神代植物公園）・小幡晃、ひたちなか海浜公園（元夢の島熱帯植物館）・玉木恭介、名誉会員・加藤雅啓、個人会員・加藤昌一、東北大学植物園・米倉浩司、小林和貴、大内匠の 11 名である。

8 月 21 日（日）には炎天の中、湖北省武漢市にある中国科学院武漢植物研究所・武漢植物園を訪問し、今回の調査に同行して貰う姜博士（研究所教授・副研究員）と面会し、姜氏の案内で、この植物園の目玉展示のひとつである水生植物やスイレン、ハスなどを見学し、また、姜氏の担当でもあるキウイフルーツのコレクションも見せて貰った。

22 日（月）からいよいよ「植物の秘境」ともいえる中国湖北省・重慶市・貴州省にまたがる地域の植物調査にバスで出発した。途中三峡ダムのある宜昌で昼食を摂る頃から雨が降り始め、目的地の神農架へ行く道は豪雨のため途中通行止めになっている箇所があるとの情報が入ったが，早期の復旧を期待してとりあえず途中の興山を目指し前進した。しかし，興山の手前で，土砂崩れに行く手を阻まれ、やむなく宜昌に引き返した。

23 日（火）の朝の地元紙には神農架で２００年に一度の豪雨で道路流失、土砂崩れで死者、行方不明者が出ているとのこと。道路復旧の見通しは立たないとのことで神農架行きは断念し、午前中は雨の中宜昌市を観光し，午後に次の訪問地利川市へとバスに揺られて移動した。

24 日（水）は天気は回復し、暑い中、利川市忠路鎮桂花村、小河郷のメタセコイア自生地を訪問。桂花村ではそこかしこに幹直径 60cm、樹高 20m を越えるメタセコイアの古木があった。小河郷で 2 番目の大木と言われる「天下第二杉」を見た。

25 日（木）は利川から北に行って謀道鎮の天下第一杉を見る。メタセコイア発見の最初の木である。見立てでは幹直径２m、樹高２５m ほどだが、石碑には樹齢 600 年とある。木を展望する台を作り、木の周りは高さ１m 程の木道がめぐらされ根を踏まないようにするなど、観光地としての整備と保護が図られている。謀道鎮からは国道を北に進み、長江を渡った万州区から高速道路に乗り、重慶へと向かった。

26 日（金）は神農架にかわるスケジュールとして重慶の南山植物園と重慶三峡博物館を訪れた。南山植物園は結構広く、梅、桜、桃の開花期には市民がいっぱい訪れるとのこと。問題は園内の植物のラベルが殆ど無いことで、植物学よりも公園という性格が強かった。

27 日（土）は重慶の南東の金佛山へ。一大観光地で、入り口でチケットを買い、専用マイクロバスでロープウエイの駅まで。ロープウエイの上の駅からチャーターしたマイクロバスで「原生樹林」に行き、そこから散策を開始。始めはシイ・カシの立派な林で、様々な植物が観察できると期待されたが、直ぐに林床が「金佛山方竹」の竹林に代わってしまい、この荀の名産地とあって、野生植物の観察は限定されたものになってしまった。それでも常緑広葉樹に落葉広葉樹が混じった林では、無道管双子葉類のスイセイジュ（水青樹）をはじめ、アオキ属、様々なシャクナゲ類など、多くの植物を観察することが出来た。夕方、金佛山から貴州省道真県に移動した。

28 日（日）も晴れで、事前に申請して許可を得ている道真県陽溪鎮の大沙河自然保護区に銀杉（*Cathaya*、マツ科 1 属 1 種）の調査に向かった。道無き道でキイチゴ，ピラカンサ、バラなど数々のトゲ植物に行く手を阻まれながらようやく自生地近くまで行ったが、生育しているのは 50 m程垂直に立った石灰岩の崖の上で、我々にはとても登れるところではなかった。下からわずかに枝が見えるのと、現地人 2 名が登って写真を撮ってきて貰うのがようやくだった。

29 日（月）は道真から貴州省の梵浄山に向かう途中の印江という町で途中泊した。一日中バスに乗っていた。

30 日（火）は印江から江口、そして梵浄山入り口に向かい、登山のあと江口まで戻って宿泊する予定だったが、国道の故障車渋滞などで江口に着いたのは予定を遥かに遅れた 2 時近くで、この日にはもう梵浄山に登ることは無理であると言うことで、急遽梵浄山の登山口に宿を取り、そちらに向かった。

31 日（水）、朝 9 時前に梵浄山ゲートを入り、マイクロバスでゴンドラリフトの駅へ、リフトの上の駅は標高ほぼ 2000 m、そこから 6000 段の石段という歩道を下り始めた。標高が上の方は落葉樹と広葉樹の混交林で、馴染みの深い実にさまざまな植物を観察することが出来た。少し下るとブナ属の多い林になり、亜高木層にはシャクナゲ類が目だった。また、尾根筋にはツガ属が、また尾根近くの斜面にはコウヨウザンが自生していた。途中、脇道を暫く行ったところにハンカチノキ（*Davidia*）の木があると言うことで花期ではないが幾人かが見に行った。こちらでも極めてわずかしか無い木である。石段は果てしなく続き、歳のいった隊員にはかなりきついものであったがようやく 15 時過ぎに全員下ることが出来た。16 時過ぎ現地をバスで出発して貴陽への途中にある凱里の町に着いたのは 23 時頃であった。

9 月 1 日（木）は貴陽に入り、昼食後同道してくれた武漢植物園の姜博士と別れた。午後はささやかな観光旅行と買い物をし、夕方の便で上海に向かった。

1 日（金）上海の浦東空港から成田に向かう。加藤雅啓隊員は関空行きだがその時点で既に台風のためのキャンセルが決まっており、運良く成田行きの同じ便に乗ることが出来、予定通りこの日に帰国できた。

以上、2 週間にわたる「日本から絶滅したが、中国になおも生き残っている植物」の調査であったが、それらの植物の多くはやはり中国でも「絶滅危惧植物」であることが多く厳重に保護されていた。また自生地が当然のことながらアクセスが非常に困難な地域にあり、当然のこととしてそこに至るには非常にないが距離と多大な時間をかけた移動が必須であった。中国の道路事情その他は予想を超えて劣悪であったりことも原因の一つであることは確かだ。その結果、長い日程に見合う十分な成果が上がったとは言い難い面もなくはない。しかし逆にそのようなものであるからこそ容易には訪れることが出来ない地を今回、協会の植物調査隊だからこそ訪問出来たとも言える。

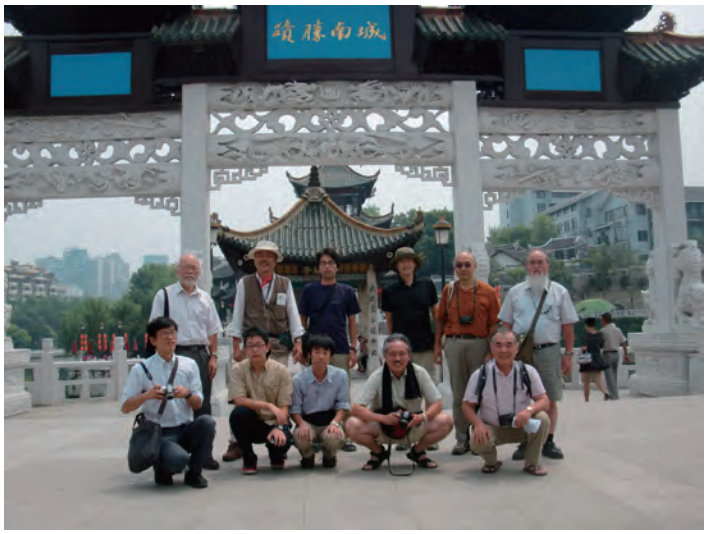
平成 23 年度隊員名簿

隊長

鈴木三男　　東北大学植物園

隊員

石川　寛　北里大学薬学部附属薬用植物園
大内　匠　東北大学植物園
小幡　晃　東京都公園協会（元神代植物公園）
加藤昌一　個人会員
加藤雅啓　名誉会員
小林和貴　東北大学植物園
玉木恭介　ひたちなか海浜公園（元夢の島熱帯植物館）
東馬哲雄　東京大学大学院理学系研究科附属植物園
能城修一　森林総合研究所
米倉浩司　東北大学植物園　　（五十音順）

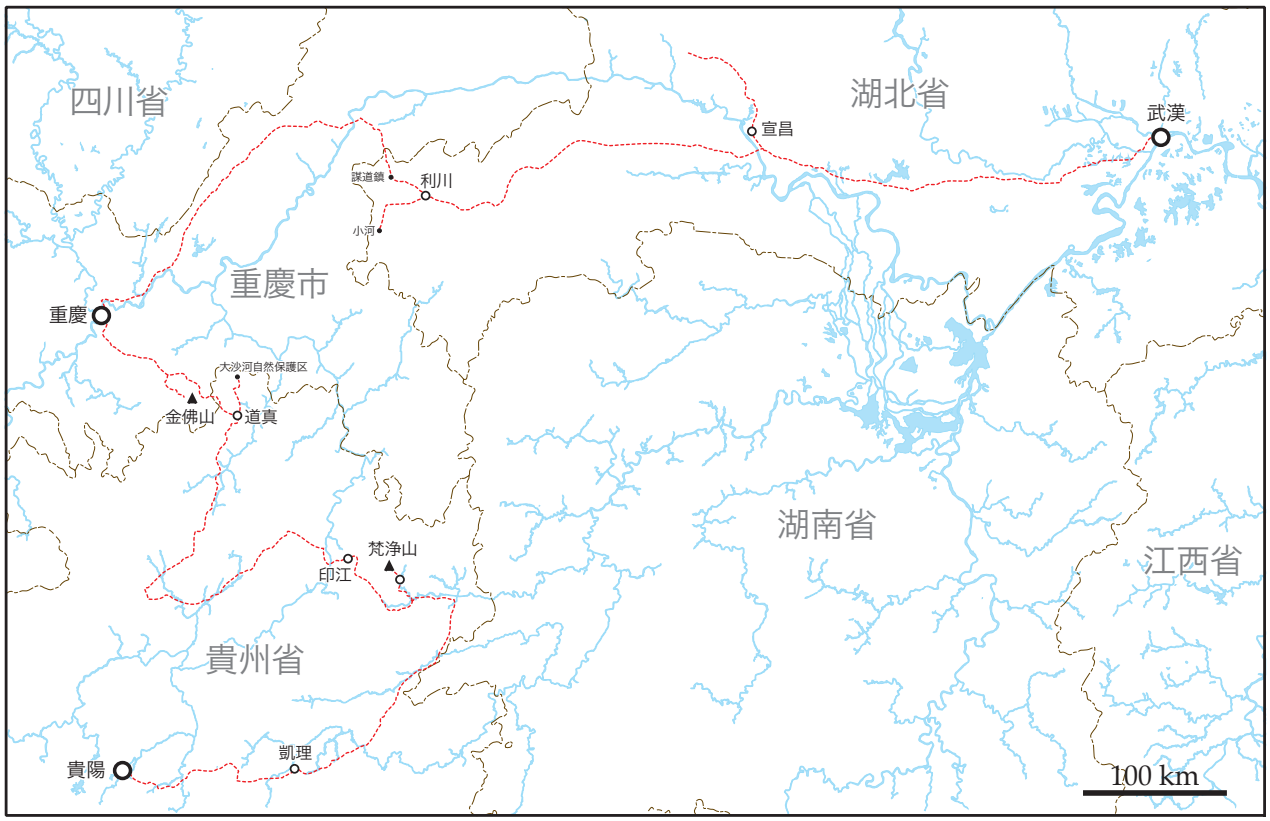


貴州省貴陽市にて（2011 年 9 月 1 日。前列左から、米倉、大内、石川、小幡、加藤昌、後列左から、加藤雅、玉木、東馬、小林、能城、鈴木）

平成 23 年度調査期間　2011 年 8 月 20 日（土）～ 9 月 2 日（金）

平成 23 年度調査行程

中国：湖北省（武漢、利川周辺）→　重慶市（金佛山）→　貴州省（大沙河、梵浄山）



調査行動記録

8月20日（土）　曇り

成田空港および関西空港より出国

上海浦東空港着	16:50	成田・関西からの隊員合流
上海浦東空港発	18:35	（バス　所要時間 0:55）
上海虹橋空港着	19:30	
上海虹橋空港発	20:50	（国内線　所要時間 1:40）
武漢空港着	22:30	
武漢空港発	22:50	（バス　所要時間 1:40）
ホテル着	0:30	武漢市内「金輝民航酒店」。

【陸路移動距離】９０km

8月21日（日）　晴れ・猛暑

ホテル発	8:20	（バス　所要時間 0:50）
武漢植物園着	9:10	武漢植物園調査
武漢植物園発	12:20	（バス　所要時間 0:10）
昼食	12:30	武漢市内「酔香隆農家菜」
	13:50	（バス　所要時間 0:30）
湖北省博物館	14:20	楚の遺跡など。15 元 / 人
	15:40	（バス　所要時間 1:25）
夕食	17:05	武漢市内「郷里人家」
ホテル着		武漢市内「金輝民航酒店」

【陸路移動距離】５０km

8月22日（月）　曇り（宜昌より山中は豪雨）

ホテル発	8:00	（バス　所要時間 4:10）
	8:55	高速道路「武漢西」入口
	12:10	高速道路「伍家崗」出口
昼食	12:30	宜昌市内「金甌大酒店」
	14:15	（バス　所要時間 4:15）
夕食	18:30	高嵐鎮内
	19:30	（バス　所要時間 4:00）
	20:00	土砂崩れ・鉄砲水不通箇所
	20:25	落石不通箇所

木魚鎮に行く途中土砂崩れに遭遇し引き返す。他のルートを取るも今度は落石により通行不可。山中で立往生の危険を感じ宜昌に急ぎ引返す。

ホテル着	23:30	宜昌市内「峡州夷陵飯店」

【陸路移動距離】５５０km

8月２３日（火）　曇り

ホテル発	10:15	（バス　所要時間 0:15）
中華蝶鮫研究所	10:30	(宜昌市内)
	11:45	（バス　所要時間 0:05）
昼食	11:50	宜昌市内「鱘皇苑酒店」
	13:30	（バス　所要時間 4:45）
ホテル着	18:15	利川市内「尚品国際酒店」

【陸路移動距離】３００km

8月２４日（水）　曇り

ホテル発	8:30	（バス　所要時間 2:30）
桂花村着	11:00	メタセコイア等調査
（標高 1,100m）		水杉原生母樹編号 1677 など
桂花村発	11:35	（バス　所要時間 0:35）
小河村着	12:10	メタセコイア等調査
（標高 1,090m）		水杉原生母樹編号 2 および 3
小河村昼食店着	13:15	小河村内「康二毛酒楼」
小河村発	14:40	（バス　所要時間 0:50）
ホテル着	17:30	利川市内「尚品国際酒店」

【陸路移動距離】１００km

8月２５日（木）　快晴

ホテル発	8:30	（バス　所要時間 1:30）
謀道鎮着	10:00	メタセコイア等調査
		水杉模式標本樹 1 : 天下第一杉
謀道鎮発	10:35	（バス　所要時間 1:50）
昼食	12:25	重慶市（万州区）内「絲調飯庄」
	13:40	（バス　所要時間 3:50）
	13:50	高速道路「万州」入口
	16:55	高速道路「？？」出口
ホテル着	17:30	重慶市内「海徳大酒店」

【陸路移動距離】３５０km

8月２６日（金）　快晴

ホテル発	8:30	（バス　所要時間 0:30）
南山植物園着	9:00	南山植物園視察　20 元 / 人
		（温室別途 20 元 / 人）
南山植物園発	12:00	（バス　所要時間 0:30）
昼食	12:30	重慶市内「塔宝花園」
	13:30	（バス　所要時間 0:30）
三峡博物館	14:00	
	15:30	（バス　所要時間 0:30）
ホテル一時戻り	16:00	
	18:00	（バス　所要時間 0:30）
夕食	18:30	重慶市内「橋興火鍋」
		（バス　所要時間 0:30）
ホテル着		重慶市内「海徳大酒店」

【陸路移動距離】５０km

8月２７日（土）　晴

ホテル発	7:30	（バス　所要時間 1:40）
	7:55	高速道路「巴南」入口
	8:35	高速道路「南泉」出口
金佛山西大門着	9:10	（専用バス　所要時間 1:05）
（標高 650m）		175 元 / 人。
索道下駅	10:15	上空より植生、植物観察
（標高 650m）		
索道上駅	10:30	
（標高 2,060 m）		（専用バス　所要時間 0:20）
原始森林着	10:50	森林植生、植物調査
（標高 2,010~1,800m）		スイセイジュ、人参木など
原始森林発	12:55	（専用バス　所要時間 0:15）
昼食	13:10	金佛山の金佛方竹料理店
	14:35	（専用バス　所要時間 0:25）
索道上駅	15:00	上空より植生、植物調査。
	15:15	（専用バス　所要時間 0:35）
金佛山西大門発	15:50	（バス　所要時間 5:20）
夕食	21:10	道真市内「小韋土菜館老土人家」
ホテル着		道真市内「民族大酒店」

【陸路移動距離】１８０km

8月２８日（日）　晴

朝食（ホテル外）	7:50	道真市内「名城豆花面」
ホテル発	8:55	（バス　所要時間 1:10）
森林管理事務所	10:05	
（標高 1,300 m）	10:20	（バス　所要時間 0:20）
天門洞入口	10:40	森林植生、植物調査。
（標高 1,570m）		
華山展望台	11:30	
（標高 1,630 m）		

天門洞入口	11:55	（バス　所要時間 0:15）
昼食	12:10	森林管理事務所
大沙河保護区	13:05	（バス　所要時間 0:45）
銀杉自生地着	13:50	森林植生、植物調査。
（標高 1,390m）		銀杉は 50m 以上の垂直岩壁の上にあり間近では観察できず。
銀杉自生地発	16:50	（バス）
ホテル		道真市内「民族大酒店」、休憩。（バス）
夕食	19:30	道真市内「賀三郷台餐庁」（バス）
ホテル着		道真市内「民族大酒店」

【陸路移動距離】７０km

８月２９日（月）　晴

朝食	7:00	ホテル隣接「韓氏小龍包」
ホテル発	8:30	（バス　所要時間 4:30）
昼食	13:00	遵義市内「灶房屋風味園」
	14:30	（バス　所要時間 6:20）
ホテル着	20:50	印江市内「勝龍酒店」

【陸路移動距離】３９０km

８月３０日（火）　晴

ホテル発	8:30	（バス　所要時間 5:40）高速道工事による渋滞
昼食	14:10	江口市内「這家＊仔飯」
	15:00	（バス　所要時間 1:00）
ホテル着	16:00	梵浄山麓門前町「不差銭山庄」
（標高 600m）		

【陸路移動距離】１２０km

８月３１日（水）　曇り

ホテル発	8:30	（徒歩）
梵浄山山門	8:55	（専用バス　所要時間 0:15）
索道下駅	9:10	（索道所要時間　035）
索道上駅	10:05	上空より植生、植物調査
（標高 2,130 m）		Fagus lucida, フウなど
石段下り始まり	10:30	森林植生、植物調査。
昼食	12:00	売店（標高 1,775m）
	12:30	ハンカチノキの自生地
石段下り終わり	15:40	（専用バス　所要時間 0:20）
（標高 950m）		
梵浄山山門	16:00	
ホテル発	16:40	（バス　所要時間 1:40）
夕食	18:20	銅仁市「銅仁家常菜」
	19:30	（バス　所要時間 3:30）
ホテル着	23:00	凱里市「国泰酒店」

【陸路移動距離】２６０ｋｍ

９月１日（木）　晴れ

ホテル発	8:30	（バス　所要時間 3:00）
	8:55	高速道路「凱里西」入口
	11:20	高速道路「貴陽」出口
昼食	11:30	貴陽市内「新侗家」
市内視察	13:00	甲秀楼など（バス）
貴陽空港着	16:30	
夕食	17:15	
貴陽空港発	19:40	（国内線　所要時間 2:20）
上海虹橋空港着	22:00	（バス　所要時間 1:00）
ホテル着	23:00	上海市内「新亜大酒店」

【陸路移動距離】１８０km

９月２日（金）　晴れ

ホテル発	9:00	（バス　所要時間 0:45）
上海浦東空港着	9:45	
上海浦東空港発	12:30	台風 12 号接近のため関空行き便は欠航し、成田便に変更。（航空機　所要時間 2:35）
成田空港着	16:05（日本時間）	解散

【陸路移動距離】３５km

調査日誌　　玉木恭介

8月20日（土）

本日から日本植物園協会海外事業調査団の一員として成田を 20 分遅れの 14 時 10 分に飛び立ちました。鈴木先生にも小幡さんにも久々に会いました。2 時間 30 分で上海浦東空港に到着、気温３２℃蒸し暑い、秋虎（オータムタイガー）と言って虎も逃げ出す暑さの週だそうです。武漢植物園の園長も暑さで逃げ出したそうで、明日はお会いできないそうです。東方航空の機内食にでた魚の飯は不味かったです。バトワイザーのパクリのようなバトビールも不味かったです。アルコール度数２．５％です。初めての中国大陸に足をふみいれました。とても楽しみで、とりあえず２万円換金しました。１元１３円でした。待ち合わせまで１時間位あったので、２階の喫茶店で時間つぶし、青島ビールを飲みました。これは旨かったです。ここで待ち人加藤雅啓先生、待てども現れず。旅慣れた加藤先生の事、上海虹橋空港に向かってしまったのではと考え、我らもぎりぎりの時間で向かう。バイパスを猛スピードで走る。皆で合流できるのか心配しましたが、何と加藤先生は居るではないか、安心しました。内心ガイドも世話役もしんどかったのではと思いシェイシェイです。上海虹橋空港を定刻より２０分遅れで武漢へ向かって出発、２２時３０分武漢空港へ到着しました。機内では大きなビスケットが配られました。とにかくお腹が空いていたのでペロリと食べてしまいました。これが良くない。今日の夕食は何とカップ麺「統一印の来一桶ラーメン」キムチ野菜、辛み付、もうむせ返るような辛さでした。日本の大盛りカップ麺と同じで、今夜はホテルの部屋でウイスキーを飲んでごまかしました。これから長旅お世話になります。おやすみなさい、小幡さん。

8月21日（日）

昨夜は小幡さんも、ベットに横になったら、もう寝ていました。ほんとに疲れました。何をしたわけではないのですがよく寝れました。朝は６時前に目を覚ましました。朝食は７時からおかゆが中心で、おいしく食べることが出来ました。豆乳もオレンジジュースも温かく、水だとかコーヒーがない、私はインスタントコーヒーを持ってきて助かりました。昨夜は暗くてわからなかったですが、カーテンを開くと窓からの風景に驚きました。前に有るはずの家並みがありません。所々にバラックが残っていますが、再開発という名の下にすべて更地になっていくのでしょうか。日本でもバブルの頃に新宿当たりで見ましたが、規模が違います。数年後には高層マンションだらけになってしまうのでしょう。中国らしさ、都市の個性がドンドン無くなって行くのですね。中国広い国だから、低層ビルで空が広く見える方が良いのにね。さあ今日から中国の旅です。中国最大の大河長江を渡りました。第２長江大橋です。中国の最初の印象はとても緑が多いことです。最初の訪問地は武漢植物園を訪れました。鈴木先生のお知り合いの姜副研究員（ジャン氏）に案内してもらいました。専門はキウイの調査研

姜博士と武漢植物園にて（2011 年 8 月 21 日。左から、小林、鈴木、姜博士、米倉、加藤昌東馬、加藤雅、石川、大内、小幡、玉木）

究だそうです。７０ｈａ、１９５６年に開園、湖北省の特徴を活かした水生植物を中心に地域の植物の保護、品種の開発、種子のデーター化に取り組んでおり、研究者は１００名、職員１００名、ＯＢ１００名体制で標本２２万点、８０００種の植物を管理している。自慢の水生植物の展示方法、東湖に隣接した探索路、ジャン氏の自慢のキウイ研究育苗圃も案内してもらいました。中国三大植物園（北京、河南、武漢）の一つ、年間入園者は昨年４０万人、今年は５０万人だそうです。さすが立派です。抽水植物の水中の状態を見せる手法は素晴らしいです。おまけに屋外で大規模に展示するなんて凄いです。管理が大変だと思いました。鈴木先生が絶対食べろというハスの実を入口の露天商から３本１０元で買ってきました。どんなお味なのか後のお楽しみです。

昼食は近くの水上レストランです。（醉香隆）馬鹿でかいお食事処でよく対応できると思いました。人海戦術の賜物です。ハス料理が名物でレンコンと鶏肉のスープは絶品です。冷めても濃厚な味わいは素晴らしいです。レンコンと鶏肉の甘辛炒めこれも名物料理で旨かったです。問題のハスの実、想像したより美味しかったです。日本でも食べれば良いのにと思いました。今日のビールは雪花（ｓｎｏｗ）。透明な瓶に水のような液体、度数も２．５％。熱い国にはとても爽やかに飲めて、カンペイの連続です。さあ午後の見学先は鈴木先生推奨の曾候乙の編鐘の演奏と現物を見ることです。全て完璧な形で発見された事は凄いです。驚きました。中国の青銅文化の素晴らしさは殷の時代の物を台湾の故宮博物館で見ましたが、とにかく素晴らしいです。青銅の楽器類がそのままの姿で発見され、演奏と舞踊を鑑賞することが出来ました。どこへ行っても馬鹿でかい建物で、歩くだけでいささか疲れました。とても蒸し暑く、よく水を飲みます。だからビールも飲んでしまうのです。

8月22日（月）

おはようございます。今日は朝から 500km 以上の移動日、ガイドの陳さんは道路が不通になっていて目的地まで行けないと心配しています。こんな長いバスの旅した事ないので楽しみです。8 時出発です。長江を渡り、漢江を渡り、大地を走ります。車窓からの風景は湖北地方の典型的な農村の風景です。水田と養殖池が必ず有る農家が延々と続きます。鶏や家鴨を飼って魚を養殖してお米を作り、平和な農家の生活を垣間見ることが出来ます。沿線にはポプラがビッシリ植えてあり、畑では白い花が咲き始めています。ワタだろうか、何だろう？ウトウト眠っている間に 350km 走りました。途中三峡ダムのある宣昌市内でいつ食べれるか解らないからと、昼食は淡水魚水族館みたいなお店に入りました。蛇、蛙、スッポン、エビ、何でもいます。鈴木先生今食べないと食べれなくなるかもしれないからと蛙にスッポンを注文する。中国のスーパーに初めてはいる。店員ばかりたくさんいて、駄菓子のようなお菓子が量り売りでたくさん並べられています。ドクダミの茎も売っています。私は毛沢東が好んで食べた、武昌魚がほしくて２匹買いました。1 匹 30 元でした。後はよくわからないけど色々な種類の月餅餅を買いました。美味しければお土産かな。今日は遅くなるので途中のレストランに入ることになりました。18 時です。薄いプラスチックのコップに紙のどんぶりだけです。ナマズの子分のようなギギが入った鍋です。ご飯にかけると意外に美味しかったです。昼間にスーパーで見たドクダミの茎が出てきました。生のまま唐辛子とニンニクを炒めた油で絡めたような料理です。あっさりして、ご飯と一緒に食べると美味しく食べることが出来ました。帰りに厨房を覗いたら、大きな中華鍋の中に先ほどの鍋の中に入っていたギギの様な魚が沢山仕込んでありました。基本的に私には辛味の強い味は体質に合わないようです。暗闇の中土砂降りの雨、そこら中でがけ崩れが起きていて２本の道路もどちらも崖崩れで通行止め、ちょっと前まで通れたのに、引き返す時には大きな石が落ちていたり、大変な旅になりました。ニュースではこのような状況は知っていましたが、思わす昔飛騨川で起きたバスの転落事故を思い出しました。クワバラクワバラ早くこんな場所から退散しましょう。ドライバーさんは狭い山道なのに U ターンさせて引き返しました。暗くて何も見えないので良かった様なもの、よく戻れました。結局昼食を食べた宜昌の町まで戻って来ました。着いたのは夜中の 23 時 30 分です。打ち合わせの結果、憧れの神農架には行けなくなりました。残念です。

8月23日（火）

いやはや日記の責任は重いな。こんな僕でも、余りグウタラ寝てる分けにも行かず、マジになっています。昨夜は悪夢のような状況で真っ暗でどのような所を走って来たのか分かりませんが、200 年ぶりと言う大変な雨の中道路のそこら中に土砂崩れや落石がライトの先に見えました。2 か所の道も不通になってしまい、昼飯を食べた、宜昌へ戻り宿泊先をきめました。朝の新聞で神農架への道はズタズタで完全に不通になり、行方不明者も出ておりたくさんの観光客が閉じ込められていることを新聞のニュースで知りました。私たちも立ち往生したときに直ぐに引き返して良かったと、今になって思いました。憧

れの神農架森林区は次回にとっておきます。いつの事やら・・・・・・・。

まだ雨は降っています。今日の予定は午前中地元の植物園か中華チョウザメ研究所の見学でしたが、雨の中植物園も大変だから、中華チョウザメ研究所を訪ねました。日本語のチョウザメ映像を見せてくれました。チョウザメが４mになるとは驚きました。もっと驚いたことは隣にチョウザメを料理して食べさせる店があることです。大変賑わっていて、昼食をチョウザメ料理にしました。900ｇぐらいのチョウザメを生きた状態で見せてくれて、姿蒸し料理とスープ料理と鍋料理にして出てきました。白身でダシがよく出て、コクのある決してくどくなく、中国人でなくても日本人も好きになります。尾っぽの先まで食べつくしました。さすがチョウザメは高い、940元でした。今まで普通に600元ぐらいですから皆大満足でした。

１３時３０分今日の宿泊地利川に向けて出発です。すべて山岳高速道路でトンネルばかりでおまけに登り坂です。山腹にへばり付く様に農家が点在しています。家の周りではトウモロコシを作っています。トウモロコシのお酒が有名みたいです。280kmの工程で18時30分にホテルに到着しました。利川市は人口70万人ドガ族とミエ族が半分ぐらい占めているそうです。利川尚品酒店、今までで一番高級なホテルです。17階の部屋はとても広く清潔です。今日から２泊は同じホテルです。今日は洗濯日かな。今日の夕食はホテルのレストランです。コースメニューだそうですが、15品ぐらい出ました。とても美味しいのですが、私にはもうそろそろ・・・・・。中華料理にちょっとゲンナリです。中国人は毎日こんな料理食べているのかな。いよいよ明日は天下第一の杉を見に行きます。とても楽しみで期待しています。

８月２４日（水）

今日は快適な朝を迎えました。雨も完全に上がり霧は掛かっていますが晴れそうです。今回私の第一の目標であった、最初に発見されたというメタセコイヤ（水杉）を見に行きます。利川市の郊外30分ぐらい走った王雲（汪营）町の国道は道路工事と町の朝市（2，5，8日）が開かれ、近郊の農家の人たちが物々交換で色々な産物を持ち寄り、販売してごった返しています。バスが通ろうがトラックが通ろうが我関せず、野菜を並べたり中には肉の塊を並べたお店もある。通過するのに１時間位かかったか、とにかく道路工事が良くないね、両側を同時に施工して要るから、排水の溝は掘るは、砕石、石積用の岩はそこら中にぶちまけるは、相互すれ違い出来ず、無茶苦茶状態です。クラクションを鳴らすわけでもなく当たり前なんですね。やっとの思いで通過して、喧騒が去ると梨畑が広がり、静かな農村になり、なし売りおばさんがパラソルを立てて売っている、そんな場所から脇道に入りました。もうこれが狭くて凸凹道でバスが走るような道ではない所を走ってくれました。そこを擦らない様に慎重に運転してくれました。マッサージ道路です。途中高速道路の橋げたの基礎工事の現場を通ったり、もう滅茶苦茶な峠越えの道です。この先にメタセコイヤの桃源郷はあるのか。途中、黄連の栽培畑がたくさんありました。漢方の故郷です。何とメタセコイアの苗木もたくさん栽培していました。聞く所では４本で１元だそうです。実生苗を栽培しているのです。初めて見ました。確かに発芽したばかりの苗は水路を切った水の豊富な所で栽培していました。利川市の限られた場所にだけメタセコイアは残って今も栽培されているのでしょうか。天下第三位という、桂花村の桂花小学校の正門の横に３本立っていました。３本接近しており明らかに人が植えた様な配列です。小学校は８m位の丘の上にあり、下を水が流れているような傾斜地に生えています。主幹部に傷は見られず、とても良好に見えます。水と太陽と石交じりの傾斜地が最高の場所になったと思いました。村人がほかにも大きいものが有ると聞き、見ました。こちらは道路沿いに列植されており４本並んでいます。高さは同じ位、一番目通り周の大きいものが周4.23mありました。どれも同じ時期に植えられたものだと思います。メタセコイアは成長が速いのですが、１年の成長量が5mmと考えて160年、大目に見て200年と考えました。今も真っ直ぐに伸びて、成長盛りです。

今も沢山の苗木を生産していますが、村人たちが大切にこの木を守ってきたのだと思いました。次は天下第二位という、小河村の木を見に行きました。とにかく汚い中国の典型的な川が流れる村です。ごみはぶちまけ、汚水は窓から捨てる、ふと思い出したのは宮崎駿氏の「千と千尋の神隠し」の中に出てくる街並みにそっくりでした。川の両側にビッシリ家が建ち、川を跨いで家があったり、石の小橋を渡って抜けると人が行きかう、目抜き通りがあります。川の上流に向かって歩いていくと、目指す木は真正面に見えてきました。石橋の袂にあり、古いレンガ作りの家があって、木との調和が素晴らしい、写真写りの素晴らしい木です。樹高30m目通り周5.1m、少し気になるのは樹木保護の為か幹から50cm位の幅しかない所に、50cm位嵩上げして石で土止め擁壁が作られて居ること、雷が落ちたらしく幹に大きな空洞が出来ていました。避雷針のような鉄のアングルが幹に張り付

けてあります。空洞部分にコンクリートで外科手術が施してあるのも気になります。しかし樹勢は最高です。川に面していて水と太陽に恵まれ健やかに成長したのだと思います。川の対岸にある石作りの建物も 40 年前まで水力発電に使われていたそうです。とにかくロケーションが最高天下第２位の樹木も幸せそうです。12 時 30 分、先ほどの町中のお食事処で昼食です。思わず映画の中のシーンで豚になってしまう場面を思い出しました。小魚の唐揚げは美味しかったです。下の川で捕った魚かもしれません。また同じ道をホテルまで戻りました。朝のような雑多な雰囲気はありませんでしたが、工事のための渋滞はひどいものです。天下第一の杉は明日重慶市へ行く途中に見学することになりました。17 時 30 分ホテル到着です。明日からは別のドライバーさんとガイドさんになります。食事は昨日と同じレストラン、昨日はあまり辛くなく食べやすかったけど、今日は無茶苦茶辛いです。唐辛子も赤か、黄、緑ともう舌が拒絶反応を示しています。重慶へ行ったらもっと辛くなるそうです。もう舌と胃袋が壊れそうです。

8月25日（木）

今日も快適な目覚めでした。昨夜の足のマッサージが利いたのか？体も痛くならず、若い女の子の甲高い声だけが心地よく耳に残っています。中国語が解らないのが残念、48 元は安い。今朝のホテルの朝食バイキングは最低です。中国の団体さんが沢山入っているのに、食事が全然足りず、席もない有様、国営ホテルのひどさですね。私は食欲もなく丁度良かったけれど、今日は重慶市までの長旅になります。350km の長旅の移動日です。途中一番見たかった、諜道鎮「天下第一杉」を見学します。国道沿いの町の一番低い湿地帯の中にありました。全方向から全景が見学できる素晴らしい見学するために有る様な樹木です。片隅に祠の跡があり、少し前までは石作りの道があった様です。今は撤去され中途半端な石の橋が残っています。今は周辺部に探索用の木製デッキがぐるりと作られ、人が中に入れない様に木製の柵も出来ています。国家もこの木に対してかなり神経を使っている様です。朝から爆竹がなり地元の中国人にとってもシンボル的な木になっているようです。先端部が曲がって来ており、典型的な高齢木の域に入っています。根元を固められているのか、メタセコイアの特徴である、梢端部の細い枝は枯れ落ちほとんどありません。太い枝のみで樹形を作っている状態で、樹木の骨格を全て望むことが出来るわけです。かなり弱っていますが、この木を守ろうとする姿勢は感じられました。周辺に大きく沼地を作ったり、根の害障になるような構造物は取り払ったり、木道と木柵で人の侵入を防いだり、模範的な対策を行っています。（しかし最近までは石作りの探索路だったようで、中途半端な石作りの橋が途中で切られたように残っています。

メタセコイアは元々湿地性の樹木のため太い直根が伸びています。樹高が真っ直ぐに高く伸びても、風害にとても強く、周辺部の踏圧を受けても他の針葉樹に比べとても耐久性があります。残念ながら目通周を直接測定することは出来ませんでしたが、樹高は 30 m以上、枝張も全方向に 20 m以上、目通周 5.1 m以上はあり天下第一の杉であることには、間違いないことは確認しました。10 時 30 分に重慶へ向けて出発です。300 キロ以上の道のり途中 12 時 30 分に大きな工場のある近くのレストランで食事をしました。飛び込みで入ったのですが、魚の切り身の入った鍋スープ料理は美味しかったです。ナマズの様な白身の魚でした。ご飯に掛けても美味しかったです。14 時ぐらいには重慶市に向けて出発です。長江の支流になるような大きな川の渓流に沿って、ぐねぐねした道を爆走です。昨日までのドライバーさんとは姿も含めて、迫力が違います。

視界が開けたと思うと、長江の壮大な流れが眼下に広がりました。後 1 時間ほどで重慶市内のホテル重慶海徳大酒店です。途中岩山の丘陵地を真っ平らに造成した開発地が広がっていました。見渡す限りとにかく造成地です。数年後には高層ビルと工場群に代わっていくのですが、将来を考えると恐ろしくなるような状況です。高層マンションがどこまでも続く街並みは異常ですね。インフラも含めてどうなっているのか、清掃工場とか上下水道などの設備が一切見られないことに恐ろしさを感じました。

ホテル内のレストランで 19 時から夕食を食べました。唐辛子の中に埋まるような状態で料理されたウサギの肉はあっさりして美味しかったです。大きなコイ科の魚の唐揚げ甘酢あんかけもあっさりして、美味しくいただくことが出来ました。隣に大きなスーパーマーケットがあるので買い物に出かけました。道端にミツバチの巣箱がたくさん置いてあり気になっていたのですが、各種蜂蜜の販売もしており驚きました。黄連、ナツメ、銀杏なんかもあるのです。思わずこれは買いです。

8月26日（金）

何と体重が 4kg も増えてしまいました。明らかに食べすぎです。今朝のホテルの朝食は、お粥とデザートだけにしました。8 時 30 分にはホテルを出発、一路南山植

物園へ向かいました。ビルの谷間と長江の河岸段丘の急斜面をジグザグに登って行き、高級住宅街の中に 70ha ほどの飛行場の入口の様なド派手な植物園です。温室も新しく素晴らしい施設です。しかし中の植物たちは、今年 11 月に行われる園芸博のために、馬鹿大きい樹木をボコボコ植えてあります。プルメリアなんか目通周が 1.2 m以上ありました。外も同じですが、とにかくテーマがなく、雲霧林地帯とか熱帯、高山地帯とか、とにかくお金を掛けています。雲霧林は発想は良いがやり過ぎで、植物が育つ環境ではないと思いました。これからの管理が大変だなあと思いました。外気が 34℃有りながら大温室の中は 25℃になっていました。温室の中で熱いと感じない管理はすばらしいと思いました。中国人の色彩感覚がそのまま表れています。赤と黄色の配色ばかり、大温室の中にベコニアの花壇を作ったり、サボテンでデザインしたり、もつと自然観で植え付ければ全体が生きてくるのだけど、これも日本人的発想か？元々岩山で松林が出来るような場所に植栽してあることと、暑さの為か桜、梅類は芳しくありません。その上密植し過ぎです。中国的な遊苑です。階段ばかり日中歩くのは少ししんどいです。

12 時集合でいざ昼食の場所へ出発、途中個人の趣味で盆栽作りをしている個人のお宅を見学、中国で行われる盆栽博覧会に出品されるそうです。サツキつつじの大きな盆栽がたくさんありました。直ぐ近くの塔宝花園へ、いかにも高級そうな作りです。100 年酵母ビール 4．6 ％を飲みました。何と 1 本 68 元普通のビールの 4 倍以上の値段です。鈴木先生、太っ腹。2 本だけ頼んでくれました。コップ 1 杯程度でしたが、これは旨いビールを飲んだ気がしました。ガイドさんが夜の火鍋料理のため辛さを控えてくれたので、どれも美味しく食べることが出来ました。特に草魚のブツ切りの入ったトマトスープ煮はとても旨かったです。隣の席に中国人の美女軍団がにぎやかで鈴木先生モテモテです。一人外語大の学生がいて重慶で日本人と初めて話したとのこと、皆鼻の下が長くなっていました。14 時には重慶中国三渓博物館へ行きました。15 時 30 分まで見学、中国的バカ大きい箱物です。

ホテルに早々に引き揚げ、本日のメイン火鍋料理へいざ出陣です。中華老字号という、長江に沿ったお店です。テラスから夕陽が沈むところも見ました。私たちには真ん中に白湯スープの鍋も入れてくれましたが、外側の大鍋には油と真っ赤になった唐辛子の液体がグラグラ煮えた中に、魚、タウナギ、豆腐、トマト、豆もやし、空芯菜、タケノコ、肉類などをしゃぶしゃぶ風に入れて食べます。熱くて辛い、それをごま油の入った小鉢にゴマ、ニンニク、塩、味の素、を入れた中に浸して、冷ましてから食べる、最後はそうめんを中に入れて茹でて食べる、想像したより美味しく食べられました。魚、豆もやし、豆腐、タケノコは美味しかったです。全て残さず食べつくしました。明日は金佛山の保護林探索です。朝は 7 時 30 分に出発です。

8月27日（土）

今朝は 6 時 30 分に朝食を済ませました。今日もお粥一杯とフルーツにしました。7 時 30 分に金佛山に向かって出発です。9 時入口に到着しました。入口でまだ外国人が珍しいのか、書類提出とかパスポートの提示などがあり妙なところが細かいです。入山料往復で 175 元と言う所です。小型バスでロープウエイ入口までジグザグ道路を登って行きます。小型乗合バスで 20 分ぐらいで 300m 位を一気に登りました。そこからゴンドラに乗り換えます。正しく日本のスキー場にあるゴンドラです。8 人乗りで従業員がのり方の指示を全然しません。誰も居ないのです。混んでいたらどうするのだろう。心配になってしまいました。20 分位で 2,060m まで登りました。金佛山は 2,257m ありますが、山頂へは登らず、原生林が残る場所まで、車で案内してくれました。至れり尽くせりです。そこから原生林の中を探索しました。シホウチクが全面に生えていて、ちょうど竹の子の収穫時期です。地元の人たちがたくさん採って出荷しています。今日の昼はタケノコ料理です。原生林の中も含めて、全域で栽培している様な勢いでした。車で案内してくれた、山の中の一軒レストランで食べました。田舎料理で旨くないと言う評判でしたが意外や意外、豚足のスモークをかけたものとタケノコの白湯スープで煮込んだようなスープ鍋、わらびをタケノコと炒め、タケノコのあっさりスープ炒めなど、お客に合わせてくれて、辛みも控えめで、とても美味しく食べました。ところが山の上で観光地なのか、外国人とみたのか 1,600 元のお支払いになってしまいました。今回の食事の中でダントツ 1 位です。

さあ原生林とは名ばかりでしたが、スダジイの類縁で最高目通周 1.7 m位が最高でした。中国の厳しい現状がありますね。歩いたのは少しでしたが、かなりばてました。下山してみたら、16 時でした。これから道真県民族大酒店に向けて出発、80 ｋｍの悪路を通りました。途中、金佛山がとても印象的でした。とにかく中国の道路工事は滅茶苦茶でやっと着いたのは 20 時 30 分位、町は薄暗く妙に赤色が目立つ街並みです。さあこれから食

事する場所を探し夕食だ。遅くなってしまい、予約していたレストランがコックが帰ってしまい店を探すことになりました。21 時で入った店が､コックは帰ってしまい、鍋などの家庭料理しか出せない、ビールは 1 ケースしかオーダーに答えないと、妬けに威勢の良いおばさんでしたが、意外や意外、キノコ鍋で 10 種類以上の地元のキノコがふんだんに入った鍋は旨かったです。最後に残ったダシでおじやにして食べました。大満足です。豚のもも肉を骨付きで煮た角煮に似た料理もうまかったです。全て平らげてしまいました。11 時近くにホテルへ引き上げました。明日は大沙河保護区へ入山します。幻の銀杉を見るためです。

8月28日（日）

道真のホテルは泊まるだけのため、7 時 30 分にホテルに迎えに来てくれたバスで朝食を食べに行く。私は隣の店で、小龍包かお粥で良かったです。しかし行った店は名城豆花面と言う、豆乳ときし麺をだし汁につけて食べる朝ごはんで、とてもシンプルで体に良かったです。さあ今日は本格的な山歩きもあるし、大丈夫でしょうか。1 時間位で米江研（あいこう）と言う町で日曜日で朝市に当たりました。ここはコウロウ族と苗族の地域でたくさんの人たちで賑わっていました。10 時 10 分ごろ到着、レストランを兼ね備えている所に森林管理局の事務所もありここの人たちの案内で入山できるわけです。1,300m で親父が梨をごちそうしてくれました。山梨だそうです。小さくても美味しかったです。最初に 30 分ぐらい入ったところの天門山の入口、崋山の展望台へ案内してくれました。1,630m、石灰岩の奇岩が目の前に見ることが出来る景勝地です。眼下に広かる景色は今朝通ってきた当たりから見えた岩山だと思います。石灰岩の岩肌に特殊な植物が生息しており、一級の場所だと思いました。展望台もあり、これからの山歩きを誰が予感したでしょうか。11 時 30 分に朝来た場所に戻り昼食です。民族料理（コウロウ族）の豆腐料理です。おからを炒った豚肉の味のする、炒め料理とか地鶏のスープ煮、タマネギのブツ切りとねぎの炒め物、茶わん蒸し料理が美味しかったです。13 時 5 分天門山の銀杉の生息地へ向けて出発です。1 時間位バスに乗り目的地の登山口に降りる。ここはコウヨウザンの人工林が広がっている中を、一気に急斜面の石灰岩の白壁に沿って下りていきます。とにかく急な斜面です。ピラカンサやノバラのイバラの中を抜けて、一つの石門の様な岩山と岩山の間の隙間をすり抜けると先に大きな岩山が見えてきます。50 メートル位はありそうです。その上に目的の銀杉があるそうです。能城先生に丁寧に双眼鏡で生えている場所を教えてもらいやっとわかる木です。とてもじゃないけど普通の人には登れるような岩山ではありません。日本人の若手と中国人のバスのドライバーと森林管理局の 2 名を編成して挑戦しましたが、やっとの思いでたどり着き写真を撮ってこれたのは中国人の 2 名だけでした。これは奇跡でした。隊長も已む得ないと判断しました。また帰りが大変でしたが､皆初めて大汗をかきました。17 時バスに戻り、物凄いスピードでホテルに戻りました。疲れもあったのか、悪路の中、皆必死の思いで寝ていました。19 時 30 分位はホテルに戻ってきました。20 時 15 分には地元郷土料理（コウロウ族）で正式な食べ方から始まりました。三卿台と言う、三の膳まであり、一台は油茶を飲みながら、茶菓子を食べ、二台は摘みを食しながらお酒を楽しみ、三台で大ご馳走を平らげる。やはり燻製を上手く利用しています。もうお腹一杯で食べれませんなんて言いながら、食べてしまう恐ろしさ。集団のなせる業です。明日の朝は 7 時 30 分に隣の小龍包の朝飯屋に行く予定です。おやすみなさい。

8月29日（月）

今日は大移動日です。朝はホテル隣の韓氏小龍包のお店に入りました。小龍包 10 個にお粥食べ放題で 20 元です。意外と美味しくいただきました。朝昼はこんな感じが良いね。

さあ 8 時には道真、印江間約 500km のバスの移動開始です。こんなに執念で見る物を追いかける旅は初めてです。バスの旅は初めてです。私は一番後ろの席を陣取り、横になって寝てばかりいました。13 時に昼食、とても素朴で美味しくいただきました。辛みも少なくこれくらいの量が最適でした。店主夫妻も気持ちが良く、思わず自家製の果実酒を勧められ 2 種類買いました。とても珍しい酒です。黒糯米酒と葡萄山桃酒です。40 元と 30 元でした。この近辺は石炭の採掘現場がある様で、燃料は石炭をつかっています。二個おみやげに貰いました。私の良いお土産になりました。とにかく町の中以外の風景は山と川と畑の連続で日本の風景そのものです。棚田や川に沿った平らな所には水田が広がり、緑一色です。何だかほっとします。日本人の DNA のなせる業かもしれません。お茶畑もたくさんあり、トウモロコシはたくさん栽培しており、今ちょうど収穫期で、どの農家の庭先と言わす、道路の縁にもお構いなしに干してあります。唐辛子も同じです。赤と黄色のコントラストがとても美しく、周りの風景はとても汚らしいのに、妙にこの色だけが光り輝いています。これが中国 4000 年の歴

史に培われた、文化の集大成のような気がしました。とにかく美しいです。私も一番後ろでグウタラ寝ているわけではありません。いろいろ感じ入りました。

20時30分頃、町中に入り、ホテル騰龍酒店に到着したのは21時を過ぎていました。とにかく何もしていないのですが、疲れました。夕食のレストランは、ホテルに隣接しています。もう準備は出来ていて、20種類の料理があっという間に並びました。どれも美味しくいただきましたが、生姜の千切りと肉を炒めた、皮付き竹の子の茹でたもの、水餃子、卵豆腐料理が美味しかったです。とにかく12時間を超える旅でした。皆様ご苦労様です。

8月30日（火）

今朝も快適に目を覚ましました。7時30分、昨夜のレストランで朝粥と豆乳麺を頂きました。太麺、細麺が有りあっさりした麺でした。ただし、私が打ったソバみたいにぶつぶつでスプーンですくって食べた方が良さそうでした。当然温かい豆乳をたっぷり頂きました。いざ最後の目的地、梵淨山視察です。往復歩いて10時間掛かる山です。8時30分に出発､江口では大きなホテルで、従業員の朝礼を8時からやっていました。コックさん、ホールさん、ホテル従業員で真剣に大きな声でやっていました。気持ちが良いですね。思わず日本人に戻りました。相変わらず埃っぽい山道をくねくねと走り続けました。大きなロックヒルダムの堰堤なんかも通過しました。何とダム湖には水はありません。全部地下に浸透してしまうそうで、大雨の時の対策だそうです。狭い道を爆走するからよい写真が撮れません。舗装はしてあるのですが、日本の簡易舗装程度で、もう凸凹だらけ、全身ガタガタです。12時ぐらいに突然巨大な工業団地の造成現場に出くわしました。これがいけない、何十台のダンプトラックが左の土採り場から右の造成現場へ何の規制もなく、国道と交差しているので、何かのトラブルから2時間位ストップです。今日の梵淨山への最終ロープウェイの乗車に間に合わなくなってしまいました。おかげで今日の宿泊予定の貴陽市のホテルがドタキャンになってしまい、梵淨山近くの民宿に泊まることになりました。昼食は14時頃通りすがりの昼飯屋に入りました。土鍋を熱くして韓国のビビンバの様な丼もので野菜が中心の具材で頂きました。これが今までの中華料理と違って美味しく頂きました。16時ごろに急き決まった民宿不差銭山荘に宿泊です。まだ明るい内に宿泊所に入ったのは初めてです。周辺地域は民宿の建設ラッシュと巨大なリゾートホテル（会員制）の建設中で、川を挟んで大きな屋根付の橋が架かり数年後には巨大な観光リゾート地になっているでしょう。夕方現場の職人たちが川を風呂代わりにしているのにはちょっと驚きました。川の中に有る島も探索用の歩道が建設中で、散歩をしている間に食事の１９時を向かえました。辛みは抑えめにしてあり美味しくいただきました。海苔の沢山入った卵とじスープが美味しかったです。私はこの海苔の食材はお土産に買います。東馬さんが気を利かせて、大皿を下げて主に渡したら、店主はなにを勘違いしたのか、もう一杯わざわざ作って持ってきました。中々気持ちは伝わりません。もう一杯美味しく頂きました。今日は早く寝たかったのですが、22時ぐらいから隣の民宿の人と主が大きな声で喧嘩をしているようです。うちのバスのドライバーさんも中に入っている様で、中々終わりません。明日の梵淨山楽しみです。おやすみなさい。

8月31日（水）

今朝も快適な目覚めでした。気になっていた足のむくみも無くなり安心しました。ただ連日の油攻めで、胃と腸が完全に疲れてしまったようです。昨夜から下痢がひどくなり心配です。もう山歩きをやっていたなんて言えないです。梵淨山の山歩きは階段が多く、かなり過酷だと聞いていました。朝食も昨夜と同じ民宿の土間みたいな所で麺と肉まん、蒸しパンを食べました。私は麺を食べただけで体力的にちょっと心配です。もう本当にお腹が空かなくってメンバーが羨ましい。8時30分、徒歩で5分くらいのところに、ド派手な梵淨山入山受付があります。入口の広場に樹形の素晴らしい杉の木（樹高15.0m目通周1.0m）が残してあるのですが直径5ｍ位の植えますに50cm位土盛りしてあります。国家的な権威で保護に努めているのでしょうが、個々の扱いがとても雑だと思いました。

まだ外国人にはチェックが厳しいようです。やっとOKが出て、15分位小型バスに揺られて、ゴンドラ乗り場です。ここでもサービスは最低です。9時15分ゴンドラ出発です。山には霧が掛かり山の全容は見ることが出来ません。気持ちは萎えてしまい、自分だけでもロープウエーで降りたい。誰か手を上げる人がいたら一緒に付いて行きたい。思っている間にあっという間に2400mの山頂直下です。さすが中国と言えども信仰の山には斧が入っていません。ロープウェイの上からも素晴らしい原始の照葉樹林の森が広がっているのが確認できます。植物についてはガイドが付きました。シーズンにはシャクナゲが見事だそうです。ここには希少植物のハンカチの木の天然木が自生している事で有名です。夢

の島公園でも当たり前に植栽していますがここが故郷のひとつかと考えると、夢の島では生育が難しいと思いました。小石川の東馬さんがアオキの原種が沢山見つかり嬉しそうでした。金佛山の自然保護林でも能城先生にシャクナゲの説明を聞きましたが、上の方でよくわかりませんでした。それが大きなシャクナゲ（樹高 12 m目通周 1m）が根上がりで見事に倒れていました。ゴンドラの支柱工事で森に穴が開き、風が抜けるようになったのが原因です。先端の葉が目の前で見ることが出来、シャクナゲと確認できました。とにかく高木です。樹齢も200 年ぐらいは立っているのでしょうね、残念です。まだ生きています。ブナも樹齢 200 年以上の物が霧の中に何本も見ることが出来ました。ブナにも後継樹が育っていません。ここはほんとの原生林、良い物を見させてもらいました。昼飯は山小屋の様な休憩所で温麺を食べました。中国の原始の照葉樹林の森を見れたことに感謝感謝です。途中私はいけませんでしたが、脇道を 20 分位下りた所にハンカチノキが有るそうで、花期は過ぎていましたが何人かは見に行きました。この山でもかなり珍しい木です。

運動不足の私には 6,000 段の階段を下るのはかなりきびしいものでした。日頃の運動不足か体力的にきつく足がガタガタになってしまいました。私がしんがりでした。15 時 40 分先発隊より 30 分位遅れて到着です。バスの乗り場で顔を洗いたいと言ったら、前を流れる川へ行けと言われて、わからないとジェスチャーしたら降り口まで連れて行ってくれました。とても澄んだ冷たい水で思わず帽子で何杯も水を頭からかけました。全身びしょ濡れになりましたが、とても気持ち良かったです。悪かったのは乗ったバスの座席シートに私の体系がくっきりと染み込んでしまったことです。さようなら感謝感謝です。足を引きずりながらバスの待っている場所へ歩いていきました。ほかの仲間はバスに居ませんが、どうせ近くで乾杯乾杯でしょう。バスの中で寝てしまいました。19 時 30 頃銅仁市の同仁家常菜へ立ち寄り夕食を食べました。ビールは旨かったです。23 時頃凱里市の国泰大酒店でお休みです。明日はいよいよ帰国のための移動開始です。

9 月 1 日（木）

いよいよ今日から 9 月 1 日。日本には台風が接近している様で心配です。3 日、4 日に予定している防災体験プログラムの事が心配です。ホテルで朝食を済ませて、8 時 30 分貴陽市へ向かう。いよいよ上海に向かう飛行機に乗ります。高速から見えるトン族の民家がほとんど統一された仕様に建て替え中です。どうも高速からの風景を意識した演出に感じられました。12 時頃には貴陽市内のトン族の民芸レストラン新同家に入り、民族料理を食べました。舞台が作ってあったり、かなりの広さの店で、トン族の若者が大勢店員としているのです。国の雇用政策かも知れないのですが、夜のショータイムに出演するのかもしれません。初めて明るい内に目的地に到着し、飛行機は 19 時 45 分発なので、初めて観光見物らしいことをしました。ガイドさんがガイドらしい仕事をしたとイキイキしてました。貴陽市のシンボル的な建築物で 1598 年建立の甲秀楼を案内してくれました。中国に来て初めて古い建築物にお目にかかりました。中華風の建物がこの風景にやはり不思議とマッチします。足が痛くて、階段坂道を歩くのが極めて億劫です。私は露店で水墨画を描いている中国人の 4 種類の縁起物の植物をテーマにした、大きな水墨画を買ってしまいました。値段は秘密、表装してどこかに飾ります。17 時には空港近くのホテルで夕食を頂きました。でも直ぐに飛行機に乗って、機内食が出るのではと不安が募りました。珍しく定刻に出発しました。

上海空港にも定刻に着きました。やはり機内食が出ましたが、私は全然食べることが出来ませんでした。上海のホテルはイギリス租界の中にあり、古い街並みと、トロリーバスが走っています。さすがに上海の町は素晴らしいです。よく出来ています。ホテルの部屋は 1 番狭かったけどね。いよいよ足が痛い。中華料理が夢に出てきます。中華料理は決まった素材の混ぜ方を変化させて、色彩を考えた油料理ですね。兎に角何でも油を通して殺菌して調理して出す料理だと思いました。明日はもう日本です。

9 月 2 日（金）

今日は中国最後の日です。上海、今世界中で一番元気な街に居ます。私たちが泊まっている、新亜大酒店とてもクラッシック調の落ち着いた建物です。天井は高く良いですね。朝食のメニューも垢抜けしています。オムレツなんかも作ってくれます。ホットコヒーもあります。ゆっくり食べて、上海の租界地の街並みを散歩しました。上海こんなに大きな町なのに、まだこんなに空が空いてる、日本とは違います。とにかく巨大な国です。バスで 11 時間走っても東京、京都間位です。巨大な国中国ありがとう、お世話になりました。中華料理はもう食べたくない。ビールも当分の間飲まない。何て言いながら 5 日には飲んでしまいました。

（完）

メタセコイア（*Metasequoia glyptstroboides*）の故郷「天下第一杉」を訪ねて

玉木恭介

メタセコイアの桃源郷。

メタセコイアの苗畑。

１．はじめに

メタセコイア属の植物は化石の中では沢山見る事ができるが、世界中で絶滅した植物群と考えられていた。しかし 1945 年に中国河北省戸利川市の揚子江の支流域でメタセコイアが発見され、生きている化石として有名になった。私も化石少年だった小学 6 年の頃（1961 年）生きている化石として授業で先生から聞いて心が騒いだ事を覚えている。名古屋市内に引越しして、名古屋市立汐路中学校に入学（1962 年）したら何と校庭にメタセコイアの苗木が植わっていた。その時の感動が、中国で発見されたメタセコイアを見たいという思いになった。毎年名古屋の実家に帰ると、中学校の校庭を眺めながら、どこまで大きくなるのだろうといつも思っていた。

社会人になってからも、都立水元公園の造成工事で日本中のメタセコイアがなくなる位沢山のメタセコイアの高木を植栽した。もう 25 年ぐらい前の話である。そんなメタセコイアとの長い付き合いもあってか、今回の海外事業調査団の目的の一つとして、「天下第一杉」の故郷を訪れる機会を私に与えてくれた。

２．歴史

1939 年に日本の各地で発見されていた常緑種のセコイアに似た、落葉種の化石が発見され発見者の京都帝国大学の三木茂博士により「メタセコイア」と命名され、1941 年に発表された（Japanese Journal of Botany 11: 237-303）。当初、「化石」として発見されたために絶滅した種とされていたが、1948 年に中国河北省利川市のある地域に生えている「水杉（スイサ）」が同種とされ、現存する事が確認された事から「生きている化石」と呼ばれ、世界中を驚かせたことは有名な話である。その後、1949 年に日本国と皇室がそれぞれメタセコイアの挿し木と種子を譲り受け、全国各地へ植えられた。

３．故郷

2011 年 8 月 24 日には、利川市郊外の、道路工事と高速道路工事で滅茶苦茶なでこぼこ道を 3 時間ぐらい掛けて峠を越えて行った。メタセコイアの桃源郷は本当にあるのか？山の斜面からは、豊富な水が湧いており、傾斜地の畑では、メタセコイアで日陰を作り漢方薬に使う黄連を沢山栽培していた。漢方薬の故郷で、村から見渡せる山には特徴的な細長い針葉樹の植林された山を見渡す事が出来た。村の近くの平らな所に降りてきたら、畑に溝を切って、水を流し「水杉」の苗を沢山栽培しているではないか。初めて見る光景であった。発芽率がとても悪いと言われるメタセコイアの実生苗、さすが水を好む樹木である。少し感動した。

最初に天下第三と言われるメタセコイアを見た。桂花村の桂花小学校の正門までの坂道の途中のガラ交じりの

天下第三杉。

岩盤上に 3 本並び、下からは水が湧き出し、明らかに人が植えた木で、一番南側の木が最大で目通り 5.05m であった。村人にとても尊敬されている様でたくさんの村人が集まってきた。小学校は 8m ぐらいの丘の上にあり、樹木にとって良い条件の場所に生えていた。村人がまだ大きいものが有ると言う所へ案内してもらうと、街道沿いに並んで 4 本あった。これも大きく最大のもので目通り 4.23m、どれも樹高は 30m 近い。参考までに、水杉の苗木は 4 本 1 元と聞いた。

天下第二のメタセコイアは小河村の外れにあった。とにかく最高のロケーションの場所にあり、石作りの製粉

天下第二杉。

工場の前の道路の真ん中にあり、石作りのアーチ橋と、川の向こう側に石作りの水力発電所（40 年前の施設で

今は使っていない）があり、絵になった。落雷にあった様で、幹が空洞で外科手術の形跡があり、コンクリートで穴を塞ぎ、避雷針の様なものが取り付けてあった。樹高 30m 目通り周 5.1m、根元を 50㎝ぐらい石垣で埋められているのが、少し気になった。

8 月 25 日秋川市から重慶までの 11 時間のバスの移動の途中で、いよいよ謀道鎮の「天下第一杉」を見学した。さすが天下第一と言うだけあって、風格が違う。老木らしく主幹の成長は止まり、湾曲が始まり、枝が肥大して全方向に伸びている。メタセコイア特有の梢端部の小枝が全て欠落して、全体の骨格が良く見渡せた。最近まで周囲を石作りの回廊が有ったのだろうか、全て撤去し木道にして、木柵も作り、人の侵入を防いでいた。農家を撤去して沼地も作ったような状態で環境から守ろうという意気込みが感じられた。入口に行き止まりの橋が残っているので想像がついた。中に入る事が出来ず、目通り周を実測出来なかったが、目測でも 5.1 m以上は遥かにあり、説明板には、「天下第一杉」樹高 30m、胸高直径 2.48m、樹齢 600 年と明記してあつた。

4．考察

中国 4000 年の歴史の中で、樹木は利用価値のあるものは全て使い尽くしているのが中国の現状である。その中で湖北省の一部地域に集中して何故水杉が残っていたのか、峠を越えて桂花村の谷に入ると急に水杉が現れ、苗木まで沢山栽培しているのか？とても不思議な光景だった。

それは成長が早く真っ直ぐに伸びるが、材の中に水分が多く、柔らかすぎて材にならない事が幸いしたと推測した。しかし漢方薬の原料になる薬用植物を栽培するためには、水が多くても成長が早く枝もあまり伸びず、真っ直ぐに成長する木が日陰を作る重要な樹木であったと推測した。私が移動した範囲は大した地域ではないと思う

天下第一杉。

が、中国では人の棲んでいる地域には大きな樹木を見る事は出来なかった。貴重な銀杉の様な樹木は、到底人が入れないようなところしか残っていないことから、推測した。

５．水杉の樹齢考察

メタセコイアの樹齢を推定するのに、名古屋市立汐路中学校のメタセコイアがほぼ正確に植えた年が分かる事、グランド脇で環境の大きな変化を受けていない事、致命的な手入れを受けていない事、筆者が毎年目視観察を行っていた事から、このメタセコイアを使用して成長量を推定した。

汐路中学校のメタセコイア。樹高　約 23m、目通り周 2.407 m、胸高直径　76.6㎝、樹齢　54 年　成長量 14.2mm ／年。

汐路中学校のメタセコイア。（上）1962 年、（下）1965 年。

上記の汐路中学校のメタセコイアを標準木として、中国の水杉の推定樹齢を算出する。

	樹高	目通り周	胸高直径	樹齢
汐路中学校	23 m	2.04 m	76 cm	54 年
天下第一杉	30 m	7.78 m	248 cm	175 年
天下第二杉	30 m	5.1 m	162 cm	114 年
天下第三杉	30 m	5.05 m	160 cm	113 年

６．結論

帰化植物として日本に移入された年代が正確に分かり、全国的に学校を中心に記念樹として植えられた事、自然樹形を維持している事、風の影響を受けにくい事などから日本にもかなり定着し、中国と同様地域の人々に保護されながら、次世代に巨樹巨木として受け継がれていく樹木になると確信した。

武漢植物園、重慶市南山植物園

小幡　晃

武漢植物園

【園の概要】

◎ 所在地　　湖北省武漢市洪山区魯磨路特 1 号

◎ 面積　　70 ha

◎ 開園　　1956 年

◎ 収集植物数　8,000 種

・特色：華中地域の資源植物、陸水水生植物、キウィフルーツ遺伝子資源

◎ 主な施設

・十のテーマガーデン：牡丹園、ツツジ園、梅園、薬草園、菊園、ハス・スイレン園芸品種展示エリア等

・八つの主要な見どころ：新設景観温室、花の小道広場、科学教育普及館、沈水植物展示エリア、雲水渓谷、心和ませる泉、三峡水没地域植物群落再現景観、岩石園

◎ 入園料　　大人 30 元　　小人 15 元

図 1. 武漢植物園案内図

1．はじめに

武漢植物園は、長江中流域湖北省武漢市、昔から景勝地として著名な東湖の畔に立地する風光明媚な植物園だ（写真 1、図 1）。中国科学院の名称を冠している植物園は中国全土で 14 あり、これらは中国に 200 以上あるとされる植物園の中でも、科学研究、植物保護、科学普及教育の総合的機能が整い、諸施設面でも充実している「格」が高い植物園である。

同植物園の調査は 9 月 21 日（日）の午前中のみで、大変慌ただしいものだった。そのため、2007 年（平成

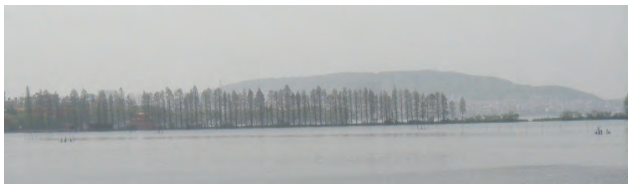


写真 1. 東湖春景（2007 年 4 月）

19 年）4 月に武漢市および武漢植物園を会場に開催された第 3 回世界植物園会議に参加したときの情報等も交え、武漢植物園を紹介する。

2．武漢植物園キウィーフルーツ研究者「姜正旺」さんからのヒアリング

武漢植物園調査は、今年度の海外事情調査全行程に同行して下さる同植物園キウィフルーツ研究者である姜（ジャン）さんと落合うためでもあった。（社）日本植物園協会は、近年会員園が指定管理に移行するものが少なくない関係から、植物園の管理体制等マネジメントに関心を寄せている。姜さんからのヒアリングでは、この点を聴取しようとしたが、国策としての中国科学院武漢植物園ということだろうか、マネジメント関係には頓着してないようだった。ヒアリングの概要は以下のとおり。

○ 1956 年中国科学院の植物園として設立、1960 年代からの文化大革命の時期には、湖北省に移管されたが、2003 年中国科学院武漢植物園となる。

○ 職員数は 300 人、内 100 人は研究者。（HP に職員数 272 人、研究者数 130 人とある。）

○ 入園者数は、40 万人。今年は 50 万人に達する模様。

○ 植物のコレクションは 10,000 種（HP に 8,000 種とある。）

○ 腊葉標本数は 22 万点以上

○ 武漢植物園の業務は、① 科学研究、② 植物保護、③ 種苗交換である。① 科学研究の内容は、(i) 分類、(ii) 資源開発部門【薬用植物、緑化等】、(iii) 園芸センター等である。(iii) 園芸センターはさらに、ア．水生植物【ハス等】、イ．薬用植物等々に区分される。

○ 園内には、郷土植物区やエネルギー植物区などもある。

○ 華中エリアの植物、水生植物、薬用植物が主要な収集、研究の対象である。

○ 武漢植物園には、学生 100 名ほどがおり、その専攻は、① 植物学、② 生態学、③ 園芸学（キーウィーフルーツも含む）である。生態学があるのは、三峡ダム建設の影響である。

図 2. 武漢植物園案内図

写真 2. 植物園大門

３．園内各ガーデン等

敷地面積は 70 ha とかなり広く、湖沼がたくさんある長江中流域特色を生かした立地にある。全域平坦地で全て植栽地（池）として利用され、単なる山林は無いようだった。10 のテーマガーデン、8 つの見どころとパンフレットには記載されているが、園内地図にはさらに多くの栽培区や施設がある（図 2)。行動ルート以下の通り。

植物園大門　⇒　旅客中心、科普楼、花径広場　⇒　景観温室（ここで姜さんと落ち合う）⇒　行政楼（姜さんからヒアリング）　⇒【以下姜さんの案内】⇒　水生群落展示区・沈水植物区　⇒　荷花・睡蓮品種展示区　⇒　隣接の水生植物生育池　⇒　湖岸区　⇒　【湖岸の園路】　⇒　竹園　⇒　猕猴桃園（姜さんのフィールド）⇒　本草園　⇒　旅客中心

（１）植物園大門付近（写真 2）

中国三大竈（かまど、ストーブ）のひとつと言われる武漢の夏は物凄く蒸し暑い。日曜日にもかかわらず些か閑散としているのは、このせいだろう。大門脇の路上で蓮の実を商っていた。鈴木先生によればこの時期の味覚だそうで、早速中国語が喋れる大内君が買いに行かされた（写真３)。

写真 3. 蓮の実売りとの価格交渉

（２）景観温室（写真 4）

解説看板によれば、2006 年に完成、面積 3,188㎡、世界の珍奇植物 1,500 余種を収集・栽培、熱帯雨林植物展示区（写真 5)、多漿多肉植物展示区、奇趣植物展示区からなる、云々とある。

北京オリンピック、上海万博など中国は国威発揚のため国際的な行事を立て続けに実施しているが、2007 年の世界植物園会議もその一環である。この温室はこれに合わせて建設されたものだろう。同会議の催しである

写真 4. 景観温室外観

ガーデンパーティーは園内の中心草坪で行われ、当日この温室前庭である花径広場は、パーティー会場の準備中、ウェルカムドリンクを提供し、参加者を待たせる場所だった。この温室は、擬岩･擬石の築山、滝を多用し集客･観光用であり､家族連れの写真スポットとなっていた（写真６)。さらに集客などを意識してか、温室裏庭を蚊帳のようなテントを張り、蝶の放し飼い展示（写真 7, 8）

写真 5. 景観温室内観（熱帯雨林植物展区）

写真 8. 蝶の放し飼い展示

写真 6. 人工滝の前は写真スポット

写真 9. さなぎの販売

写真 7. 特設展示「胡蝶花園」

や蛹等の販売を行っていた（写真 9）。

（3）水生群落展示区、沈水植物区

前回 2007 年に訪れた時も、野外に巨大なアクアリウム群を造り、その背後に水生植物の圃場である水槽を連接させた配置に、いたく感心させられたものだった（写真 10, 11）。沖縄の海洋博公園の美ら海水族館や東京都の葛西臨海水族園のように水中から眺めたような雰囲気で水生植物の展示が出来ると思ったからだ。海藻ではあるが実際、カリフォルニア州モントレー水族館がジャイアントケルプ（*Macrocsytis pyrifera* オオウキモ、コンブ目コンブ科の海藻。全長 50 mにも達し、最大の海藻と言われる）の展示を行っている（写真 12）。展示の主役は魚類等海洋動物で、植物は背景としての「ケルプの森」だが、相当な迫力と思われる。

この野外巨大アクアリウムは、武漢植物園の一番の展示だと思う。また園内にはこの他、水生生態園、水生植物資源圃があり、武漢植物園が水生植物研究に注力していることがよく判る。

帰国後に写真を見て、気がついたことだが、水中で開花するハゴロモモに似たものがあった（写真 13）。種名表示を撮影しそびれたので、中国にはこんな植物があるのかとも思ったが、花茎のアップ（写真 14）をよく見ると、ハゴロモモ同様に舟形の浮葉が付いている。沈水葉は流水に適応した細裂したふさ状、開花時にのみ花茎に付く舟形の浮葉は花を大気中に押し上げるための適応と思わ

写真 10. 野外巨大アクアリウム（沈水植物区）の全景

写真 11. アクアリウムの１区画

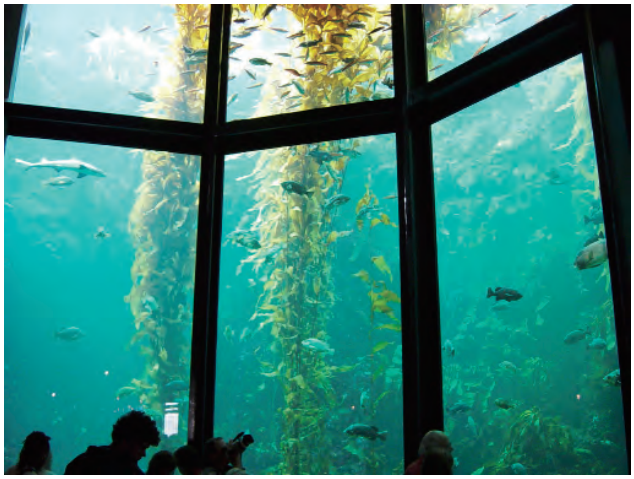


写真 12. モントレー水族館のジャイアントケルプの展示（ＨＰより転載）

れるので、生態的におかしい。もしかすると、浅い水槽で育てたものを、このアクアリウムに沈めたのかもしれないと思い、筑波実験植物園で水生植物を研究している田中法生さんに問い合わせたところ、同様の見解を示してくれた。しかも「種は *Cabomba caroliniana*（まさにハゴロモモ）だろう、*Cabomba* 属は間違いなし」とのこと。

写真 13（上）. 結論は浅所で栽培したハゴロモモ（*Cabomba caroliniana*）を沈めたもの。写真 14（中）. 花部のクローズアップ（浮葉が着いている）。写真 15（下）. 種表示板名（部分）（種小名に脱字がある）。

写真 16. アオミドロの類がはびこった水槽

写真 17. 荷花・睡蓮品種展示区全景

写真 18. 音声案内装置

また調査隊員に問い合わせたところ、小林さんから、種名表示板を送っていただいた（写真１５）。米倉さんからは「このような構造の花が水中で咲く訳はない」との見解が示された。

結論。展示してあった植物は *Cabomba caroliniana*（ハゴロモモ）。浅いところで栽培したものを水中に沈めて展示。しかも種表示板には脱字がある（*carliniana* の o が落ちている）。中国科学院の名を冠する植物園らしからぬ、誤解を招く展示だと思う。

最後に、メンテナンスが気になるところ。水槽の管理は、ガラスに付く藻や貝類による食害が問題になる（写真 16）。付近に管理作業に携わると思しき人がいたので、尋ねたところ、月に一度清掃すると言う。十分なことは分からなかった。

（４）荷花・睡蓮品種展示区

解説看板によれば、2009 年に完成、面積 5,000㎡、世界各地から睡蓮の珍品を収集・栽培、弁の睡蓮の花を象った池のつくり、云々とある（写真 17）。2007 年に

写真 19. 水生植物生育池遠景

写真 20. 水上木道脇に生えたミズワラビと思われるシダ

写真 21. 水生植物生育池の風致

訪問した以降に作られた施設の一つであり、武漢市街の開発による変わりようと合わせ、中国の経済的発展の表れと思われる。これも集客・観光用であり、音声案内装置なども作られていた（写真 18）。文字通り、ハス、スイレン、その他水生植物の園芸品種が集められている。

（５）隣接の水生植物生育池

園内の地図には表示が無く、園や区などとして扱われ

写真 22. 湖岸のトレイル

写真 23. ハス類の苗圃

写真 24. 炎暑下の竹園

ない場所で、水生植物が繁茂するところがあったので紹介しておく（写真 19）。主要な水生植物は植栽し、その他のものは勝手に生えてきたものと思われる（写真 20）。無造作で人為を感じさせず、水草のイングリッシュ・ガーデンでした（写真 21）。

（6）湖岸区、竹園

東湖畔に近年トレイルを新設したものと思われる。木道や解説板などが真新しい（写真 22）。比較的未利用な場所なので、ハスなどの苗圃がありバックヤード的使われていた（写真 23）。猛暑の日盛り竹園を経由して、猕猴桃園に向かう（写真 24）。

（7）猕猴桃園

姜さんが一番案内したかったのは、ここだったのだろう。この日以降の長い調査期間中野生のキウイを見つけると、必ず我々に教えてくれた。キウイ一筋の研究者なのだろう。ここは、かなり厳重な管理がされているようで、煉瓦塀を廻らし立入禁止の表示がある（写真 25, 26）。

写真 25（上）. 猕猴桃園周囲の煉瓦塀
写真 26（下）.「違者重罰」とある禁止表示

（8）本草園

中国の本草重視の現われか、非常に立派な門がある（写真 27）。門の視線の先には、「百草を嘗めて一薬を知」った神農氏の像がある。駆け足で門の前を通り過ぎただけのような視察だったので、2007 年 4 月に来た時のことも加えてご紹介する。前回には無かった「毒品植物」の看板（写真 28）が、今回門の脇に設置されていた。中国ではドラッグの害が酷いように思われる。ドラッグの

写真 27. 本草園の門

写真 28（上）.「毒品植物」の看板（2007 年 4 月）
写真 29（下）. 見せしめのような多数のパネル展示（2007 年 4 月）

害の見せしめのような展示はそのままだった（写真 29）。前回はケシの花盛りで大変美しかった。金網内で栽培されてはいるが、花や芥子坊主があちこちからはみ出ていた（写真 30, 31）。

（9）標本館

今回の調査では、研究関連施設は一切視察しなかった

写真 30（上）. 金網内で栽培するケシ（2007 年 4 月）
写真 31（下）. 金網からはみ出るケシの花と芥子坊主（2007 年 4 月）

ので、同じく前回の情報で補充しておく。景観温室と行政棲の間に標本館がある（写真 32, 33）。2007 年 4 月の世界植物園会議の合間に、東京大・邑田先生と大阪市大・岡田先生の標本調査にお供した。標本室は高温多湿の武漢にしては、普通のつくりに思われた（写真 34）。標本は事務用品のようなロッカーに納められており、部屋の一番奥にタイプ標本を収めたロッカーが置いてあった（写真 35）。ロッカーをいくつか開けて見ていたら、東京大学植物標本室など日本からの交換標本もあった。

4．おわりに

時間が少なく、大変残念ではあった。経済的にまだまだ上り調子の中国で、かつ国策で管理運営しており、経営のことなど気にしなくていい「幸せな」植物園のように思われた。

写真 32-35. 標本館（左上）建物 ,（左下）表示 ,（右上）内観 ,（右下）標本箱の中（2007 年 4 月）

重慶市南山植物園

【園の概要】

◎ 所在地　重慶市南岸区南山鎮南山植物園路１０１号

◎ 面積　　30 ha 程度（図 1 の範囲、有料の区域）

◎ 主な施設

　バラ園、蘭園、梅園、椿園、盆景園、中心景観園、展覧温室、大金鷹園、一棵樹景観園

◎ 入園料　植物園　　30 元

　　展覧温室　　50 元

　　【植物園と展覧温室セットでも 50 元】

　　大金鷹園　　12 元

　　一棵樹景観園　20 元

図 3. 重慶市南山植物園園内図（ＨＰより転載）

１．はじめに

大雨・土砂崩れのため 8 月 23 日の神農架調査が不可能となり、大幅に旅程が変更となった。この影響で、急遽視察することになったのが南山植物園である。関係者へのヒアリングもなく、一旅行者としての訪問である。

パンフレット、ホームページを総合すると、元来は重慶市の南郊 15 ｋｍにある景勝地（海抜 420 ～ 680.5 m、東西 5 km、南北 3.5km を占める地域）だったところに、1959 年総面積 551 ha の南山公演が建設された。1998 年に南山公園に重慶市植物園の機能を付加することが決定され、2004 年重慶市南山植物園の名称となった。

551ha の区域は、観賞植物園風景林区、専類観賞植物園区、科研苗圃区、植物生態保護区に区分される。中心景観園区（図 1 の範囲、有料の区域と思われる。約 30ha）には、植物園（展覧温室、バラ園、蘭園、梅園、椿園、盆景園、中心景観園）、大金鷹園、一棵樹景観園がある（図 1 ）。

視察したのは、植物園の部分であり、その区域に展覧

写真 36. 南山植物園大門

写真 37. 温室遠景、カスケード、オブジェ

写真 38. 第８回国際庭園博覧会マスコットキャラクター

温室がある。展覧温室は「中銭」を徴収する料金体系である。大金鷹園、一棵樹景観園はともに眺望いい観光スポットのようである（一棵樹とは地名のようである）。

２．植物園内各施設等

（１）植物園大門付近

まず目に入るのは、ユニークで真新しい門である（写真 36）。大門から次に紹介する展覧温室に至る区域は、この温室と一体整備したようで、まだ新しく大変意匠に凝った区域だ（写真 37）。中心景観園というのは、この一帯のことと思われる。中国は国威発揚のために、立て続けに国際的な行事を実施していることは、武漢植物園の項でも記述したが、2011 年、重慶においても第８回国際庭園博覧会が開催される（11 月 19 日～翌５月 30 日）温室や中心景観園の整備は、これに合わせたものであろう。また、プレイベントがこの植物園においても実施されているようである（写真 38）。

写真 39. 展覧温室正面

図 4. 展覧温室館内図（ＨＰより転載）

（２）展覧温室

面積 8,000㎡余、１億４千元をかけて建設し、2009 年 10 月１日開館したもの（写真 39）。10 月１日は国慶節（中国の建国記念日）である。自ずとこの事業の意味が分かるというものだ。内部は入口大庁、四季花卉展館、熱帯雨林展館、多肉多漿展館、高山植物展館に区画されている（図 4）。

① 入口大庁内外：軒高も大変高く２０ｍはあろうか。前

写真 40. 展覧温室　入口大庁内観

写真 43. 展覧温室　熱帯雨林展館キャットウォーク

写真 41. 展覧温室　エレベーター

写真 44. 展覧温室　時空隧道

写真 42. 展覧温室　四季花卉展館俯瞰

写真 45. 展覧温室　勿体ない温室空間

室も広くとり多数の入場者を予定してのつくりだ（写真 40）。２階にはエレベータで行ける（写真 41）。

② 四季花卉展館：文字通り花の展示場である（写真 42）

③ 熱帯雨林展館：入口大庁２階からキャットウォーク（写真 43）が伸びている。植物展示よりは観光客向けの仕掛けが多いようだった。時空隧道（タイムトンネル）という凝ったものまであった（写真 44）。屋根が高いので、樹高が高い熱帯雨林が再現できそうだが、生態展示等の運営管理は出来ていない（写真 45）。

④ 多肉多漿展館：中国の人たちは緋牡丹（*Gymnocalycium mihanovichii*）や山吹（*Cleistocactus buchtienii*）などの葉緑素を失った赤や黄色のサボテンがお気に入りのようだ（写真 46）武漢植物園景観温室にも、これらが大規模に群植されていた。

写真 46. 展覧温室　赤や黄色のサボテンは人気スポット

写真 47. 神農架深山幽谷を模した人工雲霧

写真 48. 白蘭花白蘭花（*Michelia alba*）の花

⑤ 高山植物展館：説明板によれば、湖北省神農架の植物景観を凝縮しているそうだ。ミスト発生装置を装備して、霧が常時かかる環境を再現している（写真 47）。

（3）展覧温室から梅園へ

園路沿いで目に付いた植物として、白蘭花（*Michelia alba*）の高い樹冠部に花が着か（写真 48）、黒売楠（*Limdera megaphylla*）には蕾が着いていた（写真 49）。

写真 49. 黒売楠（*Limdera megaphylla*）の蕾

写真 50. 傾斜地を生かした梅園

写真 51. 梅園の高木層はマツ。馬尾松（*Pinus massoniana* と思われる）

（4）梅園

面積 4.7ha、120 余品種、5,000 本の梅を収集した梅園である。山の傾斜地を生かした作りになっている（写真 50）。高木層はマツの疎林になっており、もとの植生

写真 52. 林内の様子

写真 55. サクラは南山植物園の呼び物

写真 53. 林床の様子

写真 56. 盆景園の門

写真 54. 薔薇園（サクラ園のことである）

写真 57. 中国式庭園に配置される盆栽

が偲ばれる（写真 51）。

（5）梅園から薔薇園へ

公園化される以前の植生が残る斜面林を登り、薔薇園へ。高木層は梅園と同じ馬尾松と思われる。林縁にはタラノキの仲間が花を咲かせていた（写真 52）。土壌は灰白色、林床にはシャガと思われる植物がある（写真 53）。

（6）薔薇園

薔薇園とは桜園のことであった（写真 54）。園芸品種が集められており、中に「日本晩櫻」というものもあった。花の時期には一番の賑わいだそうだ（写真 55）。

（7）盆景園

面積 2 ha、各地から集められた盆栽が大小数千株ある

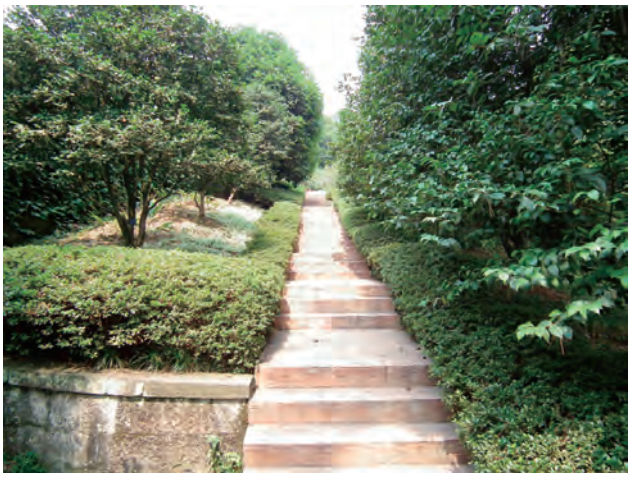


写真 58. 山茶園

写真 59. 蘭園の門

写真 60. 蘭園の鉢植えの蘭

そうだ。中国式庭園の中に、配置されている。一鉢一鉢を独立に賞玩する日本とは、一線を画しているようである（写真 56，57）。

（8）山茶園、蘭園

重慶市の花は山茶花（ツバキ）だそうだ。この山茶園には 170 余品種を集めてある。花時でないので、見るものは乏しかった（写真 58）。

写真 61. *Koelreuteria bipinnata*

写真 62. 无患子

蘭園は、面積 2 ha、8,000 鉢の蘭を栽培するとされる（写真 59）。所謂東洋蘭（温帯性のシンビジウムの類）を鉢栽培しているようだ（写真 60）。

その他、園内で目についた植物を記しておく。写真 61 はモクゲンジと思っていたら *Koelreuteria bipinnata* という別種だった。今回の調査の道中あちこちで見た黄色い花はこの種と思われる。写真 61 は无患子、日本で見るものと同じムクロジ（*Sapindus mukurossi*）だ。

３．おわりに

名称に重慶市を冠しているとおりの、市立フラワーパークだった。重慶市は 1997 年に国家の直轄市に格上げされたが、それに合わせて公園を植物園にしたもののようである。植物園としては見るものは少ないようだ。また、温室も国際庭園博覧会に合わせて立派なものを造ったが、植物園の温室としては固より、観光用としても十分には使い切っていない。日本で言う、ハコモノ行政に終っている。

中国における植物園・自然保護区管理

大内　匠

1. はじめに

2011 年 1 月中華人民共和国（以下中国）は国内総生産（GDP）において、日本を抜き世界第二の経済大国となった。他方、一人当たりの GDP に換算すると日本の 1/10 程度の発展途上国でもある。従って、貧富の差が大きいことが考えられる。また、同国は人口が世界最多であるため、同国における環境保護および環境教育が適正に行われることが重要であり、そのために植物園の役割が期待される。これらを踏まえ、本事情調査では都市部の植物園及び郊外の自然保護区の視察を行い、同国内でのこれら施設の管理法および市民の利用状況について報告する。

2. 視察地

2-1. 武漢植物園

武漢市洪山区にある植物園。中国成立後最も早く設立された植物園の一つであり、科学研究の収集・種の保存・科学の普及・教育・観光一体の国家三大中核植物園の一つでもある。国家 4A 級観光景勝地であり、面積は 70ha である。中国華中地区の資源植物及び中国における陸水生植物を収集・栽培しており、主な各種植物は 8,000 種を超えている。同園は華中地区において最も豊富な植物種多様性及び種資源の保存基地であり、東アジア最大の水生植物資源圃場、世界最多のキウィフルーツの種遺伝子資源庫を所有している。

2-2 南山植物園

重慶市南岸区にある植物園。中国亜熱帯低山植物種資源を集めた植物園である。国家 4A 級の観光地であり、面積は 551ha である。園内にはバラ園、ラン園、ウメ園、ツバキ園、盆栽園、展覧温室などがある。温室の面積は約 0,8ha である。国内外で貴重な観賞花卉約 1,000 種が植栽されている。

2-3 金佛山

重慶南部南川区内にあり、植物王国と称される国家重点景勝区。国家保護植物 52 種を含む、計 5,099 種の植物が生息している。面積は約 42,200ha である。国家保護植物には金山五絶（銀杉、銀杏、大葉茶、方竹、杜鵑王樹）および金山三精（人参、竹米、天竹黄）が含まれる。

2-4 梵淨山

貴州省銅仁地区江口県、印江土家族苗族自治県、松桃苗族自治県に接する国家級自然保護区であり、生態の王国や動植物遺伝子バンクと称される。面積は 56,700ha である。国家保護植物の中、珙桐（ハンカチノキ）、紫薇（サルスベリ）、鵝掌楸（ユリノキ）などが生息する。動物では黔金丝猴（hinopithecus brelichi）の世界唯一の生息地でもある。

3. 植物園の管理及び利用状況

武漢植物園の園内地図および我々の視察ルートは図 1 の通りであった。同園ではラベルに中国名・学名・科名・産地・用途が記載されており、園内各所に解説板が設置されていた（図 2）。同植物園の見所の 1 つに水生植物展示水槽があり、1 植物種毎水槽に植栽されていた。同水槽は展示水槽の後ろに同サイズの水槽が数層並んでおり、これら水槽で湖水中の懸濁物を沈殿させた後、展示水槽に入れていた（図 3、4）。また、この水槽の水は毎日取り替えているとのことであった。武漢市は重慶市・南京市と共に中国の三大火炉と呼ばれる程暑い地域であるため、藻の発生が懸念されるが定期的に清掃されているようでガラスは非常に綺麗であった。我々の視察時も清掃中の水槽がいくつか見受けられた。また、案内板、ラベルなどはプラスチック製であったが、水生植物展示水槽や東湖に面するデッキなど木製の施設もあった。武漢市は多湿でもある（気象統計に基づいたものではないが高温多湿が火炉と呼ばれる所以である。）ので木製施設の防腐加工処理は定期的に行われていることが推察された。入園者へのサービスとして有料で園内ガイドやカート（乗り物）の貸出も行われていた。

図 1. 武漢植物園の地図および視察ルート。

図 2. 武漢植物園におけるラベル。

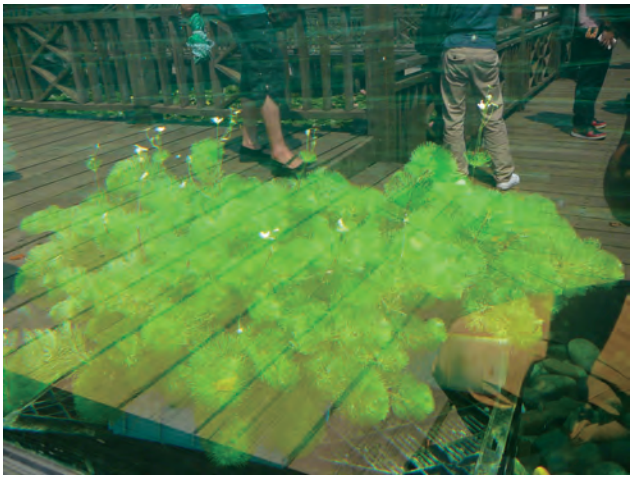


図 3. 武漢植物園の水生植物展示水槽。

図 4. 武漢植物園の水生植物展示水槽および後ろの水槽。

武漢植物園のチケットは一般入園券が 30 元、半額券（学生･60 ～ 69 歳の高齢者）が 15 元であった。このほか、身長 1.2m 以下の子ども（親同伴）・70 歳以上の高齢者・障害者・現役軍人・旅行ガイド・記者は無料入園者扱いとなる。また、年間会員制度があり個人会員では 88 元、家族会員（16 歳に満たない子どもがいる家庭。両親と子どもの 3 人が対象。）が 168 元で回数制限なく入園が可能であった。まだ夏休みであることもあって、園内には子どもが多く見受けられた。年間 40 ～ 50 万人もの入園者があるとのことで、園内の植栽植物だけでなく上記制度や施設管理も含めて広く市民に受け入れられていることが伺えた。

図 5. 南山植物園の地図。

南山植物園では各々視察を行った。同園の地図は図 5 の通りであった。同園でも園内各所にラベルや解説板が設置されており、ラベルには中国名・学名・科名・属名・産地（または分布）・用途が記載されていた。ラベルには長方形のものが中心であったが（図 6）、中には異なる形のラベルも散見された（図 7）。モミジ形と思われるラベルは常緑樹や不分裂葉にも付けられていたため、紅葉の有無や葉の形などラベルの形の違いに対する統一性を窺い知ることが出来なかった。また、ラベルの産地や分布が混同しており、産地として分布が記載されているラベルが多く見受けられた。さらに、同国の国情からと思われるが、台湾の前に「我国」が付いているものも見られた。山茶（ツバキ）園では接ぎ木している樹木の様子を見ることが出来た。結合部はビニールの紐で覆い、穂木は結合部の下を残し、ここから給水させており（図 8）、寒冷紗で気温･光を調節していた（図 9）。園内には温室、標本館や図書館などの施設、花言葉の看板といった植物に関連するもののほかに音楽家の像や宿泊者用のホテルなども設置されていた。各園やホテルの案内板などは木製であった。同園は園内各所で灌水を行っていたこともあり、湿度は高いと思われ、防腐加工処理も定期的にされていると推察された。

南山植物園のチケットは植物園 30 元、温室 50 元、植物園＋温室 50 元であった。60 ～ 69 歳の高齢者は半額、身長 1.2m 以下の子ども・70 歳以上の高齢者・現役軍人・殉職者の遺族・革命障害者・退役軍人幹部・ガン患者･障害者･記者は無料であった。なお、我々は植物園、温室込みで 40 元であったので別途割引などがあると思われた。武漢植物園同様、子どもの入園者が多かったが、他に大人の団体入園者が複数見られた。武漢植物園のよ

図 6. 南山植物園の長方形のラベル。

図 7. 南山植物園のモミジ形のラベル。

うな年間会員制度はないが、多くの市民に受け入れられていることが伺えた。

4. 自然保護区

金佛山の地図および視察ルートは図 10 の通りである。登山道は数か所あり、我々が登った西ルートは碧潭幽谷と呼ばれる道を通れば歩きでも登頂出来るが、時間的制約から途中シャトルバス・ロープウェイを利用して原始森林付近まで移動した。原始森林の入口には案内板が設置されていた（図 11）。原始森林内および周辺（ロープウェイ付近も含む）の樹木にはラベルが設置されていた。ラベルには中国名・学名・科名・属名・特徴が記載されていた。ラベル板の形は複数あるが、葉の形などの統一性は見受けられなかった。ラベルや案内板、散策路など木製のものが多く見ら、防腐加工処理などが行われているものと推察した。また一部散策路は表面が木目に似せた石質であり内部に鉄芯が入れてあった。腐食による耐用年数低下を抑えるためと思われた。

我々の利用したチケットは入山料、シャトルバス代（往復）、ロープウェイ代（往復）を含めて 175 元であった。

図 8. 南山植物園で見られた接ぎ木の結合部。

図 9. 寒冷紗で覆った接ぎ木植物。

図 10. 金佛山の地図および視察ルート。

図 11. 原始森林入口案内板。

図 12. 金佛山におけるラベル。

図 13. 金佛山原始森林の散策路。

入山者の身なりから推察すると入山者の多くが富裕層であったように思われた。入山料や入山ゲートまでの交通費を考慮すると低所得層には敷居が高いことが考えられた。ただし、我々はロープウェイを使ったため、登山道に多くの低所得者層がいた可能性も否定はできない。なお、我々の目的地では一般の入山者は見られず、一般入山者は古佛洞など、佛教所縁の地に向かったと思われた。金佛山内ではないが、入山ゲート周辺はキャンプ場として利用されており、サイクリングなどが行われていた。

図 14. 梵淨山の地図。

梵淨山の地図は図 14 の通りであり、我々はシャトルバス・ロープウェイで山頂近くまで登り、ロープウェイ到着点から歩きで下った。入山ゲートの先には森林保護条例や森林防火条例、陸生野生動物保護実施条例などの摘要の案内板が設置されており、禁止事項や注意喚起の案内板も設置されていた（図 15）。山内にはラベルはほとんどなく主にロープウェイより上部に設置されていた。ラベルには中国名・学名・科名・属名・特徴が記載されていた（図 16）。ロープウェイ上部のラベルを数個見た限りでは、ラベルの書式は統一されているようであった。散策路やベンチは石造りであり（図 17）、手摺りも石の杭に金属を通した物が使われていた。極稀に木製で柵が設置されていたが、倒木を利用したもののようで今後新たな柵が設置されることも考えられた。山内各所には山小屋が設置されていた（物品を販売したり、食事を提供したり、宿泊場所を提供しているようであった。）がこれらは木製で作られていた。山内下部で放棄された山小屋が何件か見られたため、これら山小屋は腐朽が進んできた場合、別の場所に設置していることが推察された。また、ロープウェイが設置されたことにより、山小屋そのものの需要も減りつつあることも予想された。なお、下山には相当の体力がいるため、有料で麓まで運び下ろしてもらえるサービスが行われていた。

梵淨山入園チケットは繁期（3 月 1 日～ 11 月 30 日）110 元、閑期（12 月 1 日～ 2 月 28 日）90 元であり、全日制学生・60 ～ 69 歳の高齢者・14 ～ 18 歳の未成年は半額、現役軍人･障害軍人･障害者･70 歳以上の高齢者･14 歳未満の子ども・保護区内の宗教所と同一教派の教

図 15. 梵淨山の禁止事項の案内図。

図 16. 梵淨山におけるラベル。

図 17. 梵淨山の石造りのベンチ。

職員は無料であった。また、シャトルバスは片道 10 元（往復割引はなし）であり、身長 1.1m ～ 1.4m の子ども・現役軍人・障害者は半額、身長 1.1m 未満の子どもは無料であった。ロープウェイは片道 90 元（往復 160 元）であり、身長 1.1m ～ 1.4m の子どもは半額であった。繁期に通常料金でシャトルバス・ロープウェイを往復で利用すると 290 元するため、低所得層には敷居が高い施設と思われた。山内にはロープウェイで登るグループもいれば、歩きで登るグループもいたが、ロープウェイで登るグループの服装は山登りに相応しくないものが多く見受けられた。富裕層としてみれば、観光が優先で自然観察は二の次のように思われた。また、歩きで登る側は登ることに精一杯で自然観察をする余裕がないように見受けられた。どちら側にしても梵淨山には登らないといけないという宗教的使命感のようなものを感じた。

5. まとめ

本調査を経て、中国の植物園は一般市民が対象であるのに対し、自然保護区は富裕層を対象にしていることが分かった。中国と言えば経済発展、つまり工業化をイメージしがちであるが、多くの市民が植物園を利用している。中国都市部では急激な都市開発により、騒音がひどく、空気もきれいとはいえない。しかし、植物園内では開発の音は遠くに聞こえ、かつ空気はよい。そのためか都市内の開発に対する緩衝地帯として植物園が使用されている側面はあると思われた。急激な経済発展とともに環境汚染が深刻になっていることも事実であるが、植物園を通した環境教育も浸透しており、今後環境が好転していくことを期待したい。また、自然保護区にロープウェイがあることに対しては賛否あると思われるが、このロープウェイがあることで富裕層を集めることが可能になり、地元への経済効果が期待される。これにより雇用が生まれる。さらに、入山料を取ることで山内を荒らすものの入山を抑制することもつながる。自然保護区を観光地として利用することで、今後内地の経済が発展していくことが推察された。翻って、日本を見てみると日本の山地では過疎化が進んでおり、過疎地近隣の山では入山料を取っていないところが多い。そのため、登山者があったとしても近隣への経済寄与率は低いように思われる。山地開発が善ではないが、山と地域の共栄の在り方を再考する必要があるのではないだろうか。

中国中部の植物

米倉浩司

* 註：本章で植物名の後につけた科名は，APGIII 体系による。写真に図示した植物については適宜本文中の科名を省略する。

今回の視察旅行で訪れた湖北省西部、重慶市、貴州省東北部は、中国大陸のほぼ中央を西から東に貫流する長江の中流域に当り、植物区系としては日華区系の中国中部区 Central Chinese Province（Takhtajan 1986）に含まれる。この地域は木本植物相、特に針葉樹相の多様性の高さで知られ、科のレベルでイチョウ科とトチュウ科が固有、属のレベルでもイチョウ以外に針葉樹だけでメタセコイア属、ギンサン属、イヌカラマツ属の３属が固有であり、今回貴州省で見ることのできた长苞鉄杉 *Tsuga longibracteata* もしばしば単型の独立属 *Nothotsuga* とされることがある。また、この地域は東アジアと北アメリカ東部のみに隔離して分布する属を多く産することでも知られており、その代表的なものがユリノキ属（モクレン科）である。

1. 湖北省西部の高原

最初に訪れた湖北省西部から重慶市東部にかけては標高 1,500-2,200 m 程度の主に石灰岩からなる山岳地帯で、長江はその山塊を割って流れて三峡を形成している。山塊の所々にあるピークのうち最高峰が湖北省北部の神農頂である。この山岳地帯は古くからよく開発が進んでいるため、自然林は神農架を除けばごく限られた山塊の上部にわずかに残されているだけであり、大部分は耕地か二次林となっている。しかし、こうした里山の中において、メタセコイア（ヒノキ科）やシナユリノキ（モクレン科）、トチュウ（トチュウ科）などの多くの稀少な植物が生き続けており、中には信仰の対象となっている巨木もある。二次林を構成する樹種にはハンノキ属（カバノキ科）やウルシ（ウルシ科）、イイギリ（ヤナギ科）、ヤマナラシ属（ヤナギ科）、有齿角叶鞘柄木 *Torricellia angulata* var. *intermedia*（トリケリア科）などが目立ち、またコウヨウザンやカワイスギの植林もかなりの面積にわたって見られる。写真を撮ることはできなかったが、桂花村へ下る道路沿いの林縁でシナユリノキの幼木を見ることができたので、この植物も二次林中に生育しているものと推測される。路傍の雑草は極めて多様性に富んでおり、東アジア全般に見られるもの（ミゾソバ、イノコヅチ [広義]、キンミズヒキ [広義]、ススヤアカバナ、ハエドクソウなど）、ヒマラヤからこの地域まで見られるもの（*Erioscirpus comosus*（カヤツリグサ科））など、日本からこの地域まで達するがより西には見られないもの、東南アジア地域の高地から台湾や中国中南部にかけて見られるもの（*Boehmeria clidemioides*（イラクサ科）、*Sarcopyramis bodinieri*（ノボタン科）、サクラダソウ（キキョウ科）、タイキンギク（キク科）など）、中国中部固有のもの（シュウメイギク（キンポウゲ科）、キンシバイ（オトギリソウ科）、华蟹甲 *Sinacalia tangutica*（キク科）、天南星 *Arisaema consanguineum*（サトイモ科））などが渾然一体となっていて、極めて興味深い。

○ 水杉の故郷（湖北省利川市）に見られる植物

Fig. 1. 桂花村周辺の植生。基本的に二次林かコウヨウザンの植林であり、集落近くにはウルシ、トチュウ、チャンチン、カンレンボクなどの有用樹種が植えられており、また檫木 *Sassafras tsumu*（クスノキ科）などの樹種も混在している。写真で高円錐形の落葉高木はメタセコイアと思われるが、古いものかどうかは不明である。

Fig. 2. 厚朴 *Magnolia officinalis*（モクレン科）の苗木。この場所に限らず、中国中南部の農村部では、現金収入につながる漢方薬の薬源植物や庭園樹の苗木の増産が奨励されている。小河村にて。

Fig. 3. 柳叶牛膝 *Achyranthes longifolia* ヤナギイノコヅチ（ヒユ科）。東アジアの暖帯に広く分布。川沿いの半日陰に生育。畑のへりの日当りのいい場所にも見られたのには驚いた。小河村にて。

Fig. 4. 蕁麻 *Urtica fissa* タイワンイラクサ（イラクサ科）。中国中部の固有種で、従来イラクサに当てられる台湾のものも同じものと考えるのが妥当であろう。葉の切込みの程度には変異が大きく、時には日本のイラクサにかなり近いものも見られるという。今回見たものはかなり深く切れ込んだ型。桂花村にて。

Fig. 5. 肉穂草 *Sarcopyramis bodinieri*（ノボタン科）。中国南部～南西部に分布し、属としては西はヒマラヤ、東は台湾やフィリピンに及ぶ。小河村で撮影したが、数日後に貴州省道真県でも見た。

Fig. 6. 戟叶蓼 *Persicaria thunbergii* ミゾソバ（タデ科）。東アジアに広く分布し、小河村では川沿いのやや湿った半日陰に生えていた。数日後に貴州省道真県でも見た。

Fig. 7. 马刺蓟 *Cirsium monocephalum*（キク科）。中国中部（貴州省、重慶市と湖北省西部）の固有。北村四郎博士は一時期、九州のツクシアザミ *C. suffultum* と同じとみなしたことがあり、確かに外見は似ているが，花の色は全く異なる。水杉生育地から帰る途中の清江村にて。

Fig. 8. 华蟹甲 *Sinacalia tangutica* (キク科)。中国中部の固有属。清江村にて。

Fig. 9. 鈍叶酸模 *Rumex obtusifolius* エゾノギシギシ（タデ科）。広大な中国では、特に内陸では最近まで帰化植物はそれほど多くなかったが、近年ではこの辺境でもこのような帰化植物が観察されるようになりつつある。小河村にて。

2. 重慶市中心部

重慶市の中心は四川盆地の東縁に位置し、北東 – 南西方向にほぼ平行に走る数列の急峻な山脈によってさらに細分されている。これらの山脈はそれほど高くなく、大都市重慶にも近いため古くから開発が進み、夏の重慶の炎熱から逃れるための避暑地として活用されていて、森林はあっても代償植生となっている。南山植物園では、尾根筋にはタイワンアカマツやコナラ、オオモクゲンジ、谷筋ではクスノキおよび重阳木 *Bishofia polycarpa*（ミカンソウ科アカギ属）を主体とするややまばらな林が観察された。路傍の雑草に関しては、ヒマラヤ地域との類似性はむしろ少なく、日本南部のものと共通する種が多いように思われた。例としては、オオカグマ、ホシダ、ナチシケシダ、シマキツネノボタン、ヤブヘビイチゴ (バラ科)、コミカンソウ（ミカンソウ科）、トキワハゼ（サギゴケ科）、ブクリョウサイ、ササクサ（イネ科）などがある。

○ 重慶市の四川盆地の植物（南山植物園にて）

Fig. 10. 马尾松 *Pinus massoniana* タイワンアカマツ（マツ科）を主体とする二次林。林床は乾いているが，日本と共通の植物が多く見られる。

Fig. 11. 複羽葉栾树 *Koelreuteria bipinnata* オオモクゲンジ (ムクロジ科)。園内の山の斜面に点在する。丘陵地の里山にも多く見られ，遠くからでも目立つ。

Fig. 12. 黄葛樹 *Ficus virens* var. *sublanceolata*（クワ科）。蘭園で撮影。植栽されたものと思われる。本種は重慶市内にも公園樹としてあちこちに植栽されていた。

Fig. 13. *Hydrocotyle maritima* ノチドメ（ウコギ科）。実に奇妙なことだが、本種は中国では未だに正しく理解されていないようで、チドメグサやオオチドメと混同されている。芝生にて撮影。

◎ 南日本と共通する植物の数々（Figs. 14–18）

Fig. 14. 狗脊 *Woodwardia japonica* オオカグマ（シシガシラ科）。

Fig. 15. 假蹄盖蕨 *Deparia petersenii* ナチシケシダ（イワデンダ科）。

Fig. 16. 鱼眼草 *Dichrocephala integrifolia* ブクリョウサイ（キク科）。

Fig. 17. 揚子毛茛 *Ranunculus sieboldii* シマキツネノボタン (キンポウゲ科)。

Fig. 18. 芝生の縁で隣り合って生えている黄鶴菜 *Youngia japonica* subsp. *japonica* オニタビラコ（上）と *Y. japonica* subsp. *longiflora* (下)（キク科）。両者は頭花のサイズが倍ほども違うが，それ以外ではよく似ている。

3. 重慶市 – 貴州省境の山岳地帯

重慶市南部と貴州省東部の境界付近では数段にわたって広大な石灰岩の台地が広がっており、台地上は平坦なテーブルマウンテン状を呈している所が多い。この最上部の山塊は比較的開発の手が入りにくかったために原生植生が断片的に残されており、また重慶市南川区の金佛山は地形が急峻なことに加え信仰上の理由によりこの辺りではかなり豊かな植生が残されている。この南川区は A. von Rosthorn の 1891 年の調査によってはじめてその植物相の一端が学界に知られることとなり、Diels（1900-1901）によって多くの新分類群が記載された。残念ながらベルリンに保管されていたこれらの新分類群の基準標本は第二次世界大戦時の空爆で失われたが、ノルウェーのオスロなどにそれらの重複標本が保管されているために現在でもその実体を知ることができる。中国人研究者による調査は 1930 年代半ばから始められたようで（呉・陳 2004）、特に 1940 年代に重慶に首都機能が移転すると調査密度が高まり、これが水杉や銀杉の発見につながった。この地域を特徴付ける貴重な樹木として第一に挙げられるのが銀杉 *Cathaya argyrophylla*（マツ科）であり、この山塊の最上部のいくつかの岩峯上という特殊な環境に限ってみられる（ここ以外に、広西チワン族自治区にも自生地がある）。von Rosthorn は南川区の貴州省境を詳しく踏査したが、再奥部までは足をのばせなかったらしく、銀杉の発表は中華人民共和国成立後を待たなければならなかった。この地域の植物相はまだ調査の余地があるらしく、今回見ることのできた人参木 *Chengiopanax fargesii*（ウコギ科）が金佛山に産することがわかったのはごく最近のことである。

金佛山（Mt. Jinfoshan）の上部に残された自然林はシイ属やコナラ属の常緑樹を主体とし、それにスイセイジュ、ナナカマド属、アズキナシ属、カエデ属、コシアブラ属など多種の落葉広葉樹が混生する森林で、林床にはササ類が発達していないために林床植生は多様性に富んでいる。スイセイジュは中国南西部を分布の中心とし、東はこの辺り、西はネパール東部まで分布する貴重な樹木であるが、陽樹で種子繁殖も順調にいっているらしく、路傍の石垣の間などに多数の稚樹を見ることができた。低木層はあまり発達していなかったが、特にヤマブキ（バラ科）があるのが目についた。草本は中国南西部の植物相との関係性が強いように思われ、例えば大叶金腰 *Chrysosplenium macrophyllum*（ユキノシタ科）、筒冠花 *Siphocranion macranthum*（シソ科）、毛萼双蝴蝶 *Tripterospermum hirticalyx*（リンドウ科）、钟花蓼 *Aconogonon campanulatum*（タデ科）、华赤胫散 *Persicaria*

runcinata var. *sinensis*（タデ科）、尼泊尔老鸛草 *Geranium nepalense*（フウロソウ科）、*Impatiens* spp.（ツリフネソウ科）、多裂叶水芹 *Oenanthe thomsonii*（セリ科）などが観察されたが、ミヤマイラクサ（イラクサ科）、アオミズ（イラクサ科）、ズダヤクシュ（ユキノシタ科）、クリンユキフデ（タデ科）など、日本にも生育する東アジア要素も見られた。フタバアオイ（ウマノスズクサ科）も見られたが、日本に生育するものに比べ葉の光沢が強く、随分異なった印象を感じた。興味深い草本としては、*Persicaria thunbergii* var. *hastata*（タデ科）がある。これはミゾソバにごく近いもので中国の長江流域の山岳地帯からインド東北部まで分布している植物だが、自然林の林床に限って生育し、日本産の種でいえばミゾソバよりもむしろミヤマタニソバに似た外見や生育環境である。上記の学名はこれまで適用がはっきりせず、日本産のヤマミゾソバに当てられたりしたこともあったが、今回その実体を確かめることができた。

○ 金佛山（重慶市南川区）の植物あれこれ

Fig. 19. 人参木 *Chengiopanax fargesii*（ウコギ科）。重慶市と湖南省の限られた場所に生育し、金佛山ではごく最近発見されたというが、その割には道沿いですぐ見られる。本属は本種と日本固有のコシアブラの２種のみからなる。

Fig. 20. 水青樹 *Tetracentron sinense* スイセイジュ（ヤマグルマ科）。本文中でも触れた通り、本種の生育地では開けた路傍の石垣の隙間に稚樹がずいぶんと見られ、まるで日本におけるカツラのようである。

Fig. 21. 美脉花楸 *Aria caloneura*（バラ科）。アズキナシ属の高木。日本のウラジロノキよりも葉が細長く，葉裏の毛がより褐色を帯びている。

Fig. 22. 金佛山方竹 *Chimonobambusa utilis*（イネ科）。山の斜面で所により優占する。ちょうど筍の季節で、収穫されたものがあちこちで山積みにされている。稈はわずかに四稜形をしている。四川盆地南縁の固有。

Fig. 23. *Persicaria thunbergii* var. *hastata* (= *P. sinica*)（タデ科）。枝先だけを見るとミゾソバにそっくりだが、２叉分枝を繰り返して主軸がはっきりしないなど全体の枝ぶりはかなり異なる。生育環境も、腐植質に富むやや乾いた林床でヤマミゾソバに近い。瘦果に光沢がある点もヤマミゾソバと共通であるが、枝ぶりはやはり一致しない。浙江省から記載された *Persicaria sinica* 及びインド東北部から記載された *Polygonum debile* var. *hastatum* はこれと同じものと判断される。中国の植物誌ではミゾソバと混同されているが、中国中部～インド東北部の地域に固有の独立の型として認めるべきと思う。もしミゾソバから別種とされるならば、*Persicaria sinica* Migo がその正名となるであろう。

Fig. 24. 毛萼双蝴蝶 *Tripterospermum hirticalyx*（リンドウ科）。萼に乳頭状突起がある点が特徴的なツルリンドウの仲間。中国南西部からベトナムに分布。

Fig. 25. 艾麻 *Laportea cuspidata* ミヤマイラクサ（イラクサ科）。日本から中国南西部に至る東アジア地域に広く分布。貴州省道真県でも見られた。

Fig. 26. 大叶金腰 *Chrysosplenium macrophyllum*（ユキノシタ科）。竹林下のやや湿った岩上に群生していた。長さ 6 cm に達する大形で厚手の葉は，とてもネコノメソウ属の植物には見えない。以上は原始森林とその周辺で撮影。

Fig. 27. 小花柳叶菜 *Epilobium parviflorum* ススヤアカバナ（アカバナ科）。ロープウェー山麓駅付近の明るい草原に，オオアカバナと共に生育。両種共にユーラシア大陸北部に広く分布するが，日本ではごくまれである。

貴州省道真県で銀杉保護区に行く前に訪れた石門風景区は、石灰岩台地の西端の崖に沿った地帯に位置している。台地上は開拓されてコウヨウザンやカワイスギの植林となっていたが、一部残存する二次林はノグルミ（クルミ科），ナガエブナ（ブナ科）やハリギリ（ウコギ科）、黄毛楤木 *Aralia chinensis*（ウコギ科）、有歯角叶鞘柄木 *Torricellia angulata* var. *intermedia*、ハマビワ属（クスノキ科）、ガマズミ属、アジサイ属などの植物で構成されており、種多様性は高いように思われた。崖地の石灰岩上に生育する植物は多様性に富んでおり、アオキ属、ウコギ属、ツゲ属、シモツケ属などの低木や、サツマスゲ（カヤツリグサ科）、クマガワイノモトソウ（イノモトソウ科）、ヤブソテツ属（オシダ科）などを見ることができ、湿った日陰ではイセハナビ属（キツネノマゴ科）、白接骨 *Asystasiella neesiana*（キツネノマゴ科）、シロヨメナ（キク科）、シロヤマシダ（イワデンダ科）、ミズ属（イラクサ科）などを見ることができた。台地上の路傍の明るい場所では、ランダイワラビ（コバノイシカグマ科）、ミズヒキ（タデ科）、ミズタマソウ（アカバナ科）、*Sanicula elata*（セリ科）、华萝藦 *Metaplexis hemsleyana*（キョウチクトウ科）、川続断 *Dipsacus asper*（スイカズラ科）、オトコエシ（スイカズラ科）、杏叶沙参 *Adenophora axilliflora*（キキョウ科）、ヤマニガナ？、ムラサキニガナ？、コヤブタバコ（共にキク科）などの草本を観察した。

道真県最北部の銀杉保護区内の銀杉生育地は、深い谷に面した石灰岩の急斜面にそびえる岩峰の上にあり，生育地の岩峰のすぐ下までは何とかたどり着けたものの、生育地まで急崖を登るのは装備や経験のない我々には危険すぎた。そのため生育地の台地上の植生は中国人ガイド撮影の写真から読み取るしかないが、マツ属やコウヨウザン？などの針葉樹を主体とし、それにクスノキ科らしい常緑樹を混える林のように思われ、その中に銀杉が点在しているようであった。林床は乾いているようで、ウラジロ属やササの仲間が散在している。岩峰の麓には古い石垣が見られたので、昔はこの辺りまで耕作地として使用されていたものと考えられるが、現在では保護されて林に戻りつつある。この場所で観察された樹木は，高木ではイイギリ（ヤナギ科）、楠木属 *Phoebe*（クスノキ科）、ハンノキ属（カバノキ科）があり、低木ではヤナギイチゴ（イラクサ科）、火棘 *Pyracantha fortunei*（バラ科）、黄常山 *Dichroa febrifuga*（アジサイ科）、蜆殻椒 *Zanthoxylum dissitum*（ミカン科）、云南旌节花 *Stachyurus yunnanensis*（キブシ科）、ハナイカダ属（ハナイカダ科）、リンドレイクサギ（シソ科）など、極めて高い多様性を示している。草本も非常に豊富で、湿った場所では *Elatostema ficoides*（イラクサ科）、コミヤマミズ（イラクサ科）、白毛細辛 *Asarum pulchellum*（ウマノスズクサ科）、中华抱茎蓼 *Bistorta henryi*（タデ科）、ハエドクソウ（ハエドクソウ科）、半蒴苣苔 *Hemiboea henryi*（イワタバコ科）、白接骨 *Asystasiella neesiana* や、イヌワラビ、ホウライミゾシダなどのシダが群生し、やや乾いた日陰ではシンミズヒキ（タデ科）、ドクダミ（ドクダミ科）、ナベナ、

ヌスビトハギ（マメ科）、ヤブマメ（マメ科）、ヤブタバコ（キク科）などが点在していた。岩場ではヤブソテツ属（オシダ科）、ツルデンダ（オシダ科）、イヌチャセンシダ（チャセンシダ科）、*Goniophlebium* sp.（ウラボシ科）、*Pyrrosia sheareri*（ウラボシ科）など、好石灰岩性のシダが多数観察された。生育地入口付近の陽地では、ホソバショリマ（ヒメシダ科）、シュウメイギク（キンポウゲ科）、ヒメキンミズヒキ（バラ科）、*Sarcopyramis bodinieri*（ノボタン科）、ガンクビソウ（キク科）を見ることができた。

○ 銀杉とその生育地（重慶市南川区 – 貴州省道真県）に見られる植物

Fig. 28. 重慶市南山植物園に展示されていた銀杉の標本（重慶市金佛山産）。結局生きたものを間近に見ることはかなわなかった。

Fig. 29. 銀杉（ギンサン）*Cathaya argyrophylla*（マツ科）の生育する岩場（以下すべて貴州省道真県）。マツ属が多く見られ、常緑樹としては不鮮明ながら *Phoebe*、*Daphniphyllum* らしいものが確認できる。

Fig. 30. 半蒴苣苔 *Hemiboea henryi*（イワタバコ科）。中国中部～南西部に固有。石灰岩の湿った岩場に生えるが、ここでは段々畑の跡らしい石垣の上に生育。

Fig. 31. 日本续断 *Dipsacus japonicus* ナベナ（スイカズラ科）。日本から中国中部にかけて見られる。近縁の川续断 *D. asper* は草原に普通に見られ、花はクリーム色である。共に漢方薬に用いられる。

Fig. 32. 云南旌节花 *Stachyurus yunnanensis*（キブシ科）。中国南西部の固有でこの産地は分布の東限にあたる。

Fig. 33. 絞股藍 *Gynostemma pentaphyllum* アマチャヅル（ウリ科）。東アジア～東南アジアに広く分布。

Fig. 34. 长叶天名精 *Carpesium longifolium*（キク科）。中国南西部の固有。路傍の明るい場所に生育。

Fig. 35. 尾葉茯蕨 *Stegnogramma tottoides* ホウライミゾシダ（ヒメシダ科）。台湾と中国南西部に隔離分布。

Fig. 36. 日本蹄盖蕨 *Anisocampium niponicum* イヌワラビ（イワデンダ科）。日本から中国南西部まで広く分布。最近までメシダ属として扱われていたが、2011 年にウラボシノコギリシダ属に移された。

Fig. 37. 岩鳳尾蕨 *Pteris deltodon* クマガワイノモトソウ（イノモトソウ科）。日本の九州南部と中国中南部の石灰岩地に生える。

4. 梵浄山

貴州省東部から湖南省西部にかけて北東－南西方向に走る武陵山脈の貴州省側の最高峰が梵浄山で、鳳凰頂（標高 2,572m）のほかいくつかのピークが山脈に連なって

おり、山上には寺院が点在する。この地域も信仰上の理由で奇跡的に自然度の高い植生が残されており、中国ではまれな（呉・陳 2001; 汪ほか 2005）ブナ属 *Fagus* の優占する林を見ることができる。この地域は第二次大戦後になってようやく植物学的調査の手が及び、1986 年にはアメリカとの合同調査 Sino-American Guizhou Botanical Expedition がこの山塊で行われて重複標本の一部が日本にももたらされている。最近では、観光地化も進んでいて、東の印江県側からはマイクロバスとロープウェーで標高 2,100 m まで労せずに登ることができるようになった。この地域の植生に関しては汪ほか（2005）の研究や百原（2011）による解説によって日本語で知ることができるが、今回観察された植物は季節の相違によるためか若干の違いがあるように思えた。

ロープウェー山頂駅附近（2,100 m）は尾根に近いためか林の樹高は低く、茶条果 *Symplocos ernestii*（ハイノキ科）、石木姜子 *Litsea faberi*（クスノキ科）、毛葉吊鐘花 *Enkianthus deflexus*（ツツジ科）、常緑性の *Rhododendron* spp.（ツツジ科）、西南卫矛 *Euonymus hamiltonianus*（ニシキギ科）、樺葉莢蒾 *Viburnum betulifolium*（レンプクソウ科）などが優占していた。林床は明るく、ササ類もそれほど多くないために草本植物相は極めて多様で、キヨタキシダ、テバコワラビ（共にイワデンダ科）、钟花蓼 *Aconogonon campanulatum*（タデ科）、*Persicaria thunbergii* var. *hastata*（タデ科）、*Thalictrum* sp.（キンポウゲ科）、小野扇花 *Sarcococca humilis*（ツゲ科）、凤仙花属 *Impatiens* sp.（ツリフネソウ科）、柳叶菜属 *Epilobium* spp.（アカバナ科）、短裂藁本 *Ligusticopsis brachyloba*（セリ科）、江南山梗菜 *Lobelia davidii*（キキョウ科）、小魚眼草 *Dichrocephala benthamii*（キク科）、紫菊 *Notoseris psilolepis*、オタカラコウ（キク科）、散序地杨梅 *Luzula effusa*（イグサ科）、ヒロハノコヌカグサなどを観察できた。これより上に登ればモミ属などで構成される針葉樹 – 広葉樹の混交林があるということだが、今回は時間もなく、濃い霧に包まれていたために訪問できなかった。

ロープウェー山頂駅の少し下から標高 1,500 m までの間はテリハブナが優占し、それに多くの常緑広葉樹（アラカシ、多脈青岡 *Quercus hypargyrea*、スイセイジュ、*Phoebe* sp. など）や、青榨槭 *Acer davidii*（ムクロジ科）などの落葉広葉樹が混生している。低木層には茶条果 *Symplocos ernestii*、黄丹木姜子 *Litsea elongata*（クスノキ科）、尖連蕊茶 *Camellia cuspidata*（ツバキ科）、*Magnolia* sp.（モクレン科）、*Clethra esquirolii*（リョウブ科）、*Aucuba* sp.（ガリア科）など多くの種が見られ、そのうち一部はより高い場所から引き続いて見られる。林床にはササ類が多く、乾いた場所には鄂西玉山竹 *Yushania confusa*（ニイタカメダケ属）が優占して薮をつくり、やや湿った箇所には鄂西箬竹 *Indocalamus wilsonii*（オオバヤダケ属）が生育する。このため草本層はやや発達が弱く、登山道沿いに龙头草 *Meehania henryi*（シソ科）、*Elatostema* spp.、*Pilea* spp.、华赤胫散 *Persicaria runcinata* var. *sinensis*（タデ科）、*Impatiens* spp.、ガンクビソウ（キク科）、兔儿风蟹甲草 *Parasenecio ainsliiflorus*（キク科）および各種シダ類（*Athyrium*、*Cornopteris*、*Dryopteris* など）が点在する程度である。ロープウェーの鉄塔の周辺など切り開かれた所では、*Persicaria thunbergii* var. *hastata*（タデ科）、アケボノソウ（リンドウ科）、*Clinopodium polycephalum*（シソ科）などがやや密生していた。

標高 1,500 m 付近、ちょうどテリハブナ林の下端近くに、今回昼食をとった茴香坪招待所があり、この周辺は林が切り開かれていたために草本が多く見られた。この周辺では，虫蚁菜 *Chamabainia cuspidata*（イラクサ科）、圆舌粘冠草 *Myriactis nepalensis*（キク科）のようにヒマラヤ地域から中国南西部にかけて分布する植物と、クサコアカソ（イラクサ科）やササガヤ（イネ科）のように日本から中国中部にかけて見られる植物が共存しているのが観察された。

○ 梵浄山（貴州省江口県）の植物あれこれ – 山地上部 –

Fig. 38. 光叶水青岗 *Fagus lucida* テリハブナ（ブナ科）。標高 1,500 m より上で優占する。殻斗のサイズは日本のイヌブナに近いが、果柄はずっと短い。

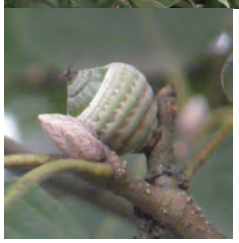


Fig. 39. 青冈栎 *Quercus glauca* アラカシ？（ブナ科）。テリハブナに混生してよく見られる。日本のアラカシに比べ、葉の側脈数が多く、殻斗の鱗片がきれいな環状になっていない。もしかしたら近縁の多脉青冈 *Q. hypargyrea* かも知れない。

Fig. 40. 有齿角叶鞘柄木 *Torricellia angulata* var. *intermedia*（トリケリア科）。中国中部の二次林に多く、ここ梵浄山では招待所周辺の伐採跡地に生えていた。湖北省や貴州省北東部では葉の縁全体に細かい鋸歯が目立ったが、ここの個体は一部の葉の縁がほとんど全縁であり、その点基準変種との中間的形態を示す。

Fig. 41. 西南卫矛 *Euonuymus hamiltonianus*（ニシキギ科）。ロープウェー山頂駅付近に見られた。日本のマユミとの区別は微妙であり、原（Flora of Eastern Himalaya 1: 639, 1966）のように同一種とした方がいいかも知れない。

Fig. 42. 茶条果 *Symplocos ernestii*（ハイノキ科）。上同様に山頂駅付近に生育する。日本のクロキに近いが、萼が宿存し、葉の縁の鋸歯が目立つ。オランダの Nooteboom は、これもクロキに含めている（Flora of China 15 参照）が、やはり別種とすべきであろう。

Fig. 43. 钟花蓼 *Aconogonon campanulatum*（タデ科）。ヒマラヤ地域から中国南西部にかけての地域に固有で，今回の訪問地の中では他に金佛山にもあった。葉裏の毛の状態によって２変種に分けられるが，今回見たものは葉裏に黄褐色毛を密生する基準変種に当る。

Fig. 44. 獐牙菜 *Swertia bimaculata* アケボノソウ（リンドウ科）。東アジアの温帯に広く分布。日本産と全く同じ姿をしている。

Fig. 45. 谷蓼 *Circaea erubescens* タニタデ（アカバナ科）。日本から中国南西部まで分布。中国語の地方名にいいものが無かったらしく、中国名は日本語の直訳。

Fig. 46. 紫菊 *Notoseris psilolepis*（キク科）。ロープウェー山頂駅の周辺に多数生えていたが、山を下りきった谷底にも生えており、金佛山にも生えているのを見た。本種の属するタイワンフクオウソウ属は、中国中南部の山地と台湾にだけ見られる属で、日本産のものではムラサキニガナ属に近いと思われる。

Fig. 47. 沟稃草 *Aniselytron treutleri* ヒロハノコヌカグサ（イネ科）。東アジアの温帯に広く分布するがそれほど普通な種ではない。しかし、梵浄山では山地上部に極めて普通に見られる。日本のものはヒマラヤ（シッキム）から記載された基準型に比べて全体大きいとして変種 var. *japonicum* として扱われているが、ここでは小さいものから日本産同様に大きいものまで連続し、区別は無意味に感じられる。

Fig. 48. 日本莠竹 *Leptatherum boreale* (= *Microstegium japonicum*) ササガヤ（イネ科）。茴香坪の伐採跡地にて発見。日本から中国中部にかけて見られ、この辺りが分布の西南限になると思われる。

Fig. 49. 細穂苎麻 *Boehmeria gracilis* クサコアカソ（イラクサ科）。前種と同じ場所に生育し，同様にこの辺りが分布の西南限であろう。

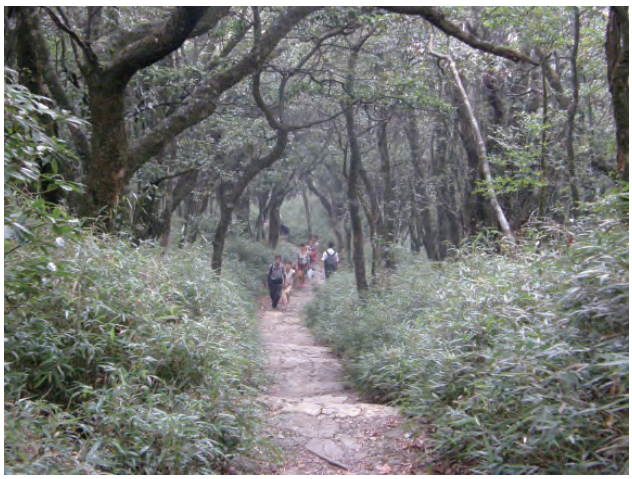


Fig. 50. 鄂西玉山竹 *Yushania wilsonii*（イネ科）。山地帯上部から下部にかけての尾根筋などの乾いた林床に密生し薮をつくる。山地帯上部には、他にも *Indocalamus*（オオバヤダケ属）の種も見られるが、本種に比べると産量は少ない。

Fig. 51. 假冷蕨 *Athyrium atkinsonii* テバコワラビ（イワデンダ科）。東アジアの暖帯の山地に広く分布。林縁や林床に点在する。

標高 1,500 m 以下ではテリハブナよりナガエブナが多くなり、それに多くの落葉広葉樹や常緑樹が混生するのに加え、尾根筋では長苞鉄杉 *Tsuga longibracteata*（マツ科）やコウヨウザンなど針葉樹が混生するのが大きな特徴である。谷頭部の湿った場所では、まれにハンカチノキ（ミズキ科）が混生するが、登山道沿いからは見ることはできない。落葉広葉樹には他にも、*Padus* sp.（バラ科）、檫木 *Sassafras tzumu*（クスノキ科）、吴茱萸五加 *Gamblea ciliata* var. *evodiifolia*（ウコギ科）、フウ（フウ科）、瑞木 *Corylopsis multiflora*（マンサク科）など、多くの種類が見られる。亜高木層～低木層にはゴンズイ（ミツバウツギ科）、穂序鵝掌柴 *Schefflera delavayi*（ウコギ科）、落葉性の *Rhododendron*、紅紫珠 *Callicarpa rubella*（シソ科）などが多く、山地上部とはかなり趣きが異なっている。林床の尾根筋に *Yushania* が多いのは山地上部と共通だが、尾根をはずれた場所では *Indocalamus* はほとんど姿を消し、代わりに赤竹 *Sasa longiligulata*（ササ属）が密生している。草本では尾根沿いにウラジロとカネコシダ（共にウラジロ科）やシマヤマソテツとキジノオシダ（共にキジノオシダ科）が目立つようになり、他にケヤブハギ、ヌスビトハギ、シンミズヒキ、ハダカホオズキ、ヒヨドリバナ、ササクサなど、日本にも見られる種類があるが、林床が暗いこととササ類が多いために多様性としてはあまり高くない。一千歩山荘より下は谷沿いの斜面となって林床の湿度も高くなり、多くのシダ類が生育するようになる。代表的なものとしてはクルマシダ、ハヤマシダ（共にチャセンシダ科）、ムカゴシダ（コバノイシカグマ科）、オオカナワラビ（オシダ科）、タイワンヒメワラビ（オシダ科）などがある。シダ類以外では、ミツバフウロ（フウロソウ科）、ヤブミョウガ（ツユクサ科）、オオバチドメ（ウコギ科）などが見られたが、これらの日本と共通する種に加えて、高標高域と共通する *Persicaria thunbergii* var. *hastata*、*Notoseris psilolepis* なども見ることができた。

Fig. 52. 水青岡 *Fagus longipetiolata* ナガエブナ（ブナ科）。梵浄山の山地下部を特徴づける樹木。その名の通り果柄はイヌブナ的に長いが、殻斗はブナのように大きい。

Fig. 54. 吳茱萸五加 *Gamblea ciliata* var. *evodiifolia*（ウコギ科）。尾根筋に多い落葉中高木。日本のタカノツメにとてもよく似ている。タカノツメ属は従来本種に基づく *Evodiopanax*（ゴシュユのようなウコギという意味で命名。中国名も同じ）として扱われることが多かったが、ヒマラヤ地域でより早く記載された *Gamblea ciliata* と種のレベルでは同じものであることがわかり、2000 年に日本のタカノツメと共に組合せが変更された。

Fig. 53. 長苞鉄杉 *Tsuga longibracteata*（マツ科）。山地帯下部の尾根筋にナガエブナと混生。葉が細長く、常にらせん状につく点でツガの仲間とはずいぶん違った印象を受け、しばしば独立属 *Nothotsuga* とされることがある。

Fig. 55. 短梗木荷 *Schima brevipedicellata*（ツバキ科）。小笠原産のヒメツバキにやや似ているように思われる。

Fig. 56. 野鴉椿 *Euscaphis japonica* ゴンズイ（ミツバウツギ科）。山地帯中部～下部に多い低木。東アジアの暖帯に広く分布する。

Fig. 57.　珙　桐 *Davidia involucrata* ハンカチノキ（ミズキ科）。中国中部～西南部に固有の単型属。登山道からはずれてササ藪の斜面をひたすら下ってようやくたどり着けた。ここでは谷頭の湿った斜面を好むようである。

Fig. 58. 赤竹 *Sasa longiligulata*（イネ科）。山地帯の中部から下部にかけて、やや湿り気のある斜面に群生する。中国ではササ属は珍しく、日本でササの占めているニッチは *Indocalamus*（オオバヤダケ属）、*Yushania*（ニイタカメダケ属）、*Fargesia* など他の多くのタケ亜科の属によって埋められていることが多い。本種は花の特徴からササ属とされてはいるが、葉舌が著しく長いことや、地下茎の枝分かれの様式が違って見えるなど、何とも違和感を覚える植物である。

Fig. 59. 瑞木 *Corylopsis multiflora*（マンサク科）。日本産のトサミズキ属植物よりも高い木になり，花序も細長い一方，葉の鋸歯はごく低くほとんど全縁に見える。

Fig. 60. 尾根筋によく見られたシダ。光里白 *Diplopterygium laevissimum* カネコシダ（左）、耳形瘤足蕨 *Plagiogyria stenoptera* シマヤマソテツおよび華東瘤足蕨 *P. japonica* キジノオシダ（右）。いずれも日本に産するが、カネコシダやシマヤマソテツは日本ではごく稀である。

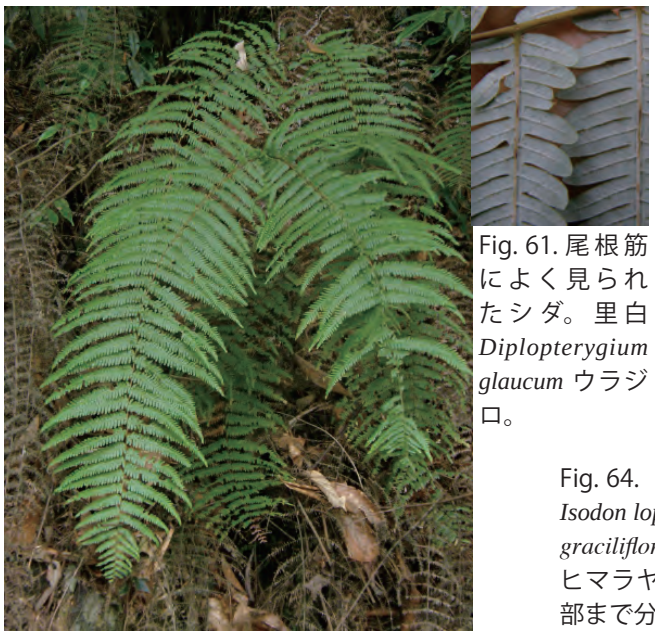


Fig. 61. 尾根筋によく見られたシダ。里白 *Diplopterygium glaucum* ウラジロ。

Fig. 64. 线纹香茶菜 *Isodon lophanthoides* var. *graciliflorus*（シソ科）。ヒマラヤから中国中南部まで分布する。

Fig. 62. 四国鉄角蕨 *Asplenium* × *shikokianum* ハヤマシダ（チャセンシダ科）。谷に近い斜面に片親のクルマシダと混生しているが、クルマシダよりも個体数が多く、もう一方の親らしい種は見つからなかった。

Fig. 65. 龙珠 *Tubocapsicum anomalum* ハダカホオズキ（ナス科）。東アジアの暖帯に広く分布するが，中国ではかなり稀な植物である。

Fig. 63. 牯岭藜芦 *Veratrum schindleri*（シュロソウ科）。ハンカチノキ自生地付近の湿った斜面にキク科コウモリソウ属の兔儿风蟹甲草 *Parasenecio ainsliiflorus* と混生。シュロソウに近いが，花序の枝が水平に開出する。中国中部の固有で，この辺りが分布の西南限にあたる。

○ その他の自生植物

Fig. 66. 牡荊 *Vitex negundo* var. *cannabifolia* ニンジンボク（シソ科）。今回訪れた地域全てにおいて、山麓の路傍に普通。貴州省江口县闵孝乡明星村にて撮影。

Fig. 67. 构树 *Broussonetia papyrifera* カジノキ（クワ科）。日本産のものよりも集合果が大きい。貴州省印江县缠溪镇の山中にて撮影。

Fig. 68. 刺梨 *Rosa roxburghii* イザヨイバラ（バラ科）。撮影地は前に同じ。この場所は休憩のために偶然停車したに過ぎないが、他にもキブシ属やヤマコウバシなど色々と面白い植物が見られた。刺梨は日本のサンショウバラの姉妹種と考えられ、中国中部〜南西部の高地に普通。本種の果実を使った菓子が貴州省みやげとして売られていた。

Fig. 69. 大叶醉鱼草 *Buddleja davidii* フサフジウツギ（ゴマノハグサ科）。今回の訪問地全てにおいて路傍に普通に生育。写真は湖北省の高速道路・野三関 PA で撮影。

Fig. 70. 假福王草 *Paraprenanthes sororia* ムラサキニガナ？（キク科）。貴州省の道真県と梵浄山で見た（写真は道真县阳溪镇华山のもの）。中国植物誌の検索表に従う限り本種に落ちるが、花は日本産と異なり淡紫色であり、中国植物誌にも同様に記載されている。中国南西部のものは別の種に属するものではないか？

Fig. 71. 高大翅果菊 *Pterocypsela elata* ヤマニガナ？（キク科）。本種も貴州省道真県と梵浄山両方に生育しており、中国植物誌の表題の種の記載によく一致する。本種は中国中部から記載されたもので、北村（植物研究雑誌 21: 52, 1947）が日本のヤマニガナを本種に同定してから誰も疑わなかったが、頭花がヤマニガナよりも小さく色も薄く、葉の切れ込み方にも違和感がある。チョウセンヤマニガナを含め、日本産のこの仲間には検討の余地がある。

○ 番外編（栽培植物）

Fig. 72. 辛亥革命の発端となった武昌蜂起（1911 年 10 月）からちょうど 100 年目を迎える武漢市武昌では、革命 100 周年の記念式典の準備が少しずつ進められている。植物園内でも、さりげなく温室の中に「辛亥百年」の表示が作られていた。サボテン科の *Hylocereus*（三角柱属 : *H. guatemalensis* か？）を台木にして *Gymnocalycium*（緋牡丹）などを接ぎ木したもので文字を作成し、その周囲には *Aloe*（ツルボラン科）の小苗が配置されていた。

参考文献

Diels, L. 1900–1901. Die Flora von Central-China. Nach der vorhandenen Litteratur und neu mitgeteilten Original-Materiale. Bot. Jahrb. Syst. 29: 169–659, t. 2–5, f. 1–5.

百原新 2011. 貴州省東北部梵浄山のテリハブナとナガエブナの優占林 . 植生史研究 20(2): 55–56.

Takhtajan A. L. 1986. Floristic Regions of the World. 522 pp. University of Califormis Press.

汪正祥，藤原一繪，雷耘 2005. 中国の Fagus lucida 林と Fagus engleriana 林に関する植物社会学的研究 . 植物地理・分類研究 53(1): 43–65.

呉征鎰，陳心啓 (編) 2004. 中国植物誌 1: 1044 pp. 科学出版社 , 北京 .

湖北・重慶・貴州のアオキ属

東馬哲雄

私は植物多様性の研究に携わっていることもあり、日本のみならず国外にも頻繁に足を運んできた。特に、東アジアの植物多様性については、中国大陸での野外調査が欠かせない。しかし私のような若手研究者世代は、中国研究者とのコネクションが薄く、野外調査の実施には大きな壁があった。一方で中国人若手研究者は、日本の植物を調べたいと思っている。お互いにギブアンドテイクの関係を築くことで、なんとか中国人研究者と親しくしてもらい、ここ数年で、雲南、四川、海南、広東、湖北、湖南、江西、浙江、香港といった中国各地に赴くことができた。しかししかし、中国はとてつもなく広く、まだまだ調査をしたい、しなくいてはいけない地域がある。金佛山と貴州省もそのひとつであったため、植物園協会からの案内を見て即座に飛びついた訳である。

研究暦もそれなりになってきたこともあるが、国内外での野外調査を重ねるうちに、いろいろと気になる植物がみつかり研究を進めている。その中でも一番付き合いが長いのが、アオキ属（*Aucuba*）である。アオキの研究をしていますというと、多くの人は「ああ、アオキねえ」といった反応が返ってくる。日本では、一部地域を除けば、その辺の山に入れば普通にある植物で、特に見栄えのする植物でもなく、あって当たり前の植物であるから仕方がない。しかしアオキ属は日華植物区系を代表する植物群であり、日本の植生を代表するといっても過言ではないと勝手に思っている。アオキ属は、10 数種に種分化した植物群で種数が多くはないが、依然として分類が混沌としている。系統分類・進化多様性の研究としてはもってこいの植物である。

ここでちょっと余談を。アオキ属は日本の植物図鑑ではミズキ科（Cornaceae）とされている。一方、中国の一部の植物誌では、単型科アオキ科（Aucubaceae）とされることもある。ところが最近の系統関係を踏まえた分類体系（APG システム）では、ミズキ科でもアオキ科でもなく、北米西南部からメキシコにかけて分布するガリア属（*Garrya*）とともに、ガリア科（Garryaceae）にする見解となっている。

さてアオキ属であるが、その多様性は中国にある。概ね長江より南の地域の山地に分布し、特に西南部で種多様性が高く複数の種が同所的に見られることも多い。一方で種分類の難しさから、Flora of China（2005）では暫定的な分類がなされるに留まっており、10 種が認識されている（私が研究をしていることが記されているが現在進行形でもう少し時間がかかりそうである）。しかしおそらくは 15 ～ 20 種はあると思われる。分類の混乱の要因としては、中国大陸では日本とは全く異なり生育密度が極めて低く、そもそも生育できる森林が伐採されていること、雄雌異株であること、葉の変異が非常に大きいこと、標本にすると植物体全体が真っ黒く変色することなどが考えられる。

私はとにかく野外調査に出かけ実物を見ることを心がけ、属内分類の他、雑種形成や染色体倍数化など進化的側面からも研究を進めている。これまでの結果としては、アオキ属は想像以上に複雑な雑種形成・倍数化が生じていることがわかってきている。その中でも確実に

写真 1. 金佛山の林床にみられたアオキ属植物。タイプ産地であることから *Aucuba albopunctifolia* であろう。

なってきたことは、中国大陸・台湾に広く分布するとされてきた *A. chinensis* の従来の認識が大きく間違っている点である。*A. chinensis*（タイプ産地は香港）は、真っすぐ伸びた幹をもつ 10m 以上になる高木種で、花は淡黄色、雄花は長い花糸を持つ。しかし台湾や中国東部で *A. chinensis* とされてきた個体の形態は、日本周辺のアオキ *A. japonica* に似ている。DNA 情報から推定した系統関係でも、香港産個体と台湾産個体は異なる系統に位置することからも、誤認識は明らかである。真の *A. chinensis* は広東・海南の限られた山にだけ点々とあり、同じように淡黄の花をもつ高木である四川省峨眉山固有の *A. omeiensis* と、雲南・貴州に点々とある稀産種 *A. eriobotryifolia* と単系統群となり、形態的にも系統的にも亜属として認識できるくらい分化している。文献情報では *A. chinensis* は中国大陸・台湾に広くあるとされ、標本でもほとんどが *A. chinensis* と誤同定されているのが現状である。

そこで問題となるのが、誤認識されているものが何者かということである。これまでの現地調査・標本調査から複数の分類群に区別できる（新種も含む可能性もある）ことはわかってきたが、まだまだ調べなくてはいけない。タイプ標本は見たがいまいちわからないため、タイプ産地で実物を見る必要がある。例えば *A. obcordata* は湖北西部・宜昌、*A. albopunctifolia* は重慶・金佛山がタイプ産地であるし、中国でもまだまだ学術的な調査の空白地域のひとつである貴州は研究上非常に重要である。このような背景のもと今回の調査に参加したのであるが、ここでは各地で観察できたアオキ属と、研究上、気になっている植物について報告する。

重慶・金佛山

スイセイジュやコナラ属などの大木が残る原始森林（29°00'12N, 107°11'18E, alt. 2,010m）での散策をはじめてすぐに、林床でアオキ属植物が見つかった（写真 1）。他の隊員は誰も気づいてくれない。これがアオキだと言っても、そういわれればそうかなあといった感じであった。森林は入り口付近だけで徐々に、金佛方竹の林になっていくが、アオキは生育していた。個体数はそこそこであるが、小さな個体がほとんどで大きなものでも 1m ほどである。写真のように葉の形態変異が大きいが、すべて同じ分類群と思われ、*A. albopunctifolia* であろう。写真左の個体が比較的タイプ標本の形態に似ている。

原始森林の林床では他に、日華区系植物を代表するズダヤクシュがたくさんみられ、*Arisaema consanguineum*、複数の *Impatiens* も見られた。研究しているツルリンドウ属 *Tripterospermum* が 2 種（開花していた *T. hirtycalyx* と *T. lanceolatum* か？）が同所的に生育していた（写真 2）。

写真 2. 金佛山の林床にみられたツルリンドウ属植物。

貴州省道真・華山

道真周辺は石灰岩地域で、華山も石灰岩が露出していた。天門洞周辺（29°04'35, 107°32'02, alt. 1,570m ～ 107°31'55, alt. 1,630m）の散策では、ハナイカダ *Helwingia japonica* やシナキブシ *Stachyurus chinensis* などの日華区系植物がみられた。アオキ属も生育していそうなのだが、ちょっと乾燥しすぎかと思っていた時、他の隊員が石灰岩の断崖絶壁からの絶景を上から覗き込んでいた。皆が覗き込む目の前に、それなりの大きさでまだ青い果実をつけたアオキ属植物があるではないか（写真 3）。これも金佛山と同様に *A. albopunctifolia* であろう。断崖絶壁付近は多少湿っていたので生育に適しているようだ。他には、*Impatiens* や *Strobilanthes* なども見られた。

貴州省道真・大沙河自然保護区

銀杉 *Cathaya argyrophylla* の自生地であるだけあって、とても興味深い場所であった。自生地への道を少し進むとアオキ属があった（29°08'11N, 107°34'48, alt. 1,390m）。やはり他の皆さんは気づかず素通りであった。葉の葉脈が異なることから *A. albopunctifolia* ではない。四川省や雲南省などでも見るような形態であるが、残念ながら花を確認できないので種名は不明（写真 4）。

写真 3. 華山・天門洞のアオキ属。右写真（展望台から撮影）の岩の割れ目に生育している。

写真 4. 大沙河のアオキ属植物その 1

写真 6. 大沙河の常緑キブシ *Stachyurus yunnanensis*

写真 5. 大沙河のアオキ属植物その 2.

道を進み、岩壁の隙間を通り抜け、銀杉自生地の直下まできた（29°08'11N, 107°35'03E, alt. 1,350m）。銀杉は断崖を登った上にあると案内人は言う。当初と話が違うと押し問答が続いたが、この時間この場所は、私には

とても幸運であった。これまでとは違う種のアオキ属植物が生育していた（写真 5）。斑入りの葉であるが、斑入りはアオキ *A. japonica* では園芸品でみられるが、中国・台湾では野外で普通に斑入りの葉に出会う。それよりも驚きは、この集団内の葉の変異が半端なく大きい点である。倒心臓形の葉をもつ *A. obcordata* といえるもの（写真 5-A）から、細長い葉をもつ *A. angustifolia* といえるもの（写真 5-B）、さらにはその中間的な葉をもち *A. albopunctifolia* といえるもの（写真 5-C）まで同所的に生育している。異なる種の混成集団とも考えられなくもないが、おそらくは任意交配集団であろう。実は、*A. albopunctifolia*、*A. obcordata*、*A. angustifolia* については分類学的に混乱している種群で、後者 2 つは *A. albopunctifolia* の変種 var. *obcordata*、var. *angustifolia* と分類されることもある。この同一種の変種の関係にする分類学的扱いには疑問を抱いていたが、大沙河での集団を見てしまうと、あながち見当違いではないという考えに至った。

大沙河では他に、石灰岩の岩壁から果実をつけた常緑性キブシ *Stachyurus yunnanensis*（写真 6）や、湿った林床にはシナハナイカダ *Helwingia chinensis* などが見られた。

貴州省・梵浄山

貴州省印江から梵浄山への道中、中国人らしい無秩序な工事現場での渋滞に巻き込まれたため予定変更となり梵浄山の麓での宿泊となった。到着がまだ明るい時間帯であったので、宿の裏山（27°50'45N, 108°46'64E, alt. 600m）に入ると、これまでとは異なるツルリンドウ属

写真 7. 梵浄山のアオキ属植物 .

写真 8. 梵浄山のトベラ属植物 .

植物があったが、花がなく同定はできなかった。翌日、専用バスとロープウェイを乗り継ぎ、梵浄山 2,130m の地点（27˚54'39N, 108˚41'49E）に到着。さあここから 6,000 段の階段を下山するのかと思った矢先、森の中にはアオキ属植物がみつかり、残り 1,000 段の場所（27˚53'47N, 108˚43'17E, alt. 1,100m）まで点々と様々なサイズの個体が生育していた（写真 7）。*A. albopunctifolia* に似ていなくもないが、おそらく別種で、江西省や浙江省でみた形態に似ている。これまで *A. chinensis* などにされてきたものと思われ、もしかしたら既存の学名には当てはまらないものしれない。それにしても、ここまでアオキ属に出会うと、さすがに他の隊員も認識してくれるようになった。これまで中国各地でアオキ属の調査を行ってきたが、これほどまでにまとまって生育している場所は、はじめてである（とは言っても日本よりは個体数は遥かに少ない）。世界自然遺産にはまだ登録されていないが、さすがユネスコが認める生物の宝庫である。植物ではハンカチノキ、ユリノキ、シャクナゲや *Fagus lucida* の大木が自生し、動物ではキンシコウが生育する森林である。非常に良い状態で森林が保護されているのも中国では珍しい。実は、*A. eriobotryifolia* に会えるかなと少し期待していたのだが、少し標高が高すぎたかもしれない。

他に気になる植物としては、研究を進めているトベラ属 *Pittosporum* をみることができた（写真 8）。中国には 50 種ほどあり、日本では岡山兵庫のみにあるコヤスノキ *P. illicioides* そのものや、それに非常に近縁な種がいくつかある。今回の種は葉を見ればコヤスノキにとても似ているが、大きな果実（中には赤いネバネバした種子が多数）をもち、*P. omeiense* ではないかと思う。その他にハナイカダ、ヒマラヤキブシ、*Daphne*、*Lasianthus*、*Skimmia*、*Aristolochia*、*Lobelia davidii*、*Swertia* などを見ることができた。

写真 8. 南山植物園に植栽される園芸アオキ .

写真 8. 南山植物園に植栽されるトベラ .

武漢植物園および南山植物園

中国では多様なアオキ属である、1 種くらいは植物園で見ることができるかなと期待し、武漢植物園と南山植物園の視察もしたが、残念ながら栽培はされていなかった。代わりに、前述した斑入りアオキ *A. japonica* がよく植えられている。"Variegata" という品種名で、日本や中国のみならず、世界各地で庭先などに植えられる。挿し木での栽培が非常に容易で、常緑性で年中青く、赤く実る果実が好まれるからであろう。

他に気になる植物では、植物園、公園、高速道路のサービスエリアなど至る所に植えられていたトベラ *P. tobira* である。トベラは日本では東北以南の太平洋側、新潟以南の日本海側と海岸林にみられ、東シナ海の沿岸にも分布するとされるが、最近の見解では、中国東海岸にあるトベラは植栽由来とも考えられている。白い花や独特の香りが好まれているのかはわからないが、低木で栽培も容易で扱いやすく、園芸的に出回っているのであろう。

最後に、今回は陸路での長距離移動で強行軍であったがこれが中国の旅である。訪問先、出会った植物については、とにかく満足のいくものであった。

中国湖北・重慶・貴州で観察した生薬基原植物について

石川　寛

１．はじめに

「生薬」とは、植物、動物などの天然物に簡単な加工を施し、薬として用いるものである。何種類かの生薬を組み合わせ、決められた量で配合して、煎じ薬や丸剤などとしたものが「漢方薬」である。「漢方」はかつて中国から伝わった医術が日本で独自の発展を遂げたものであり、中国の伝統医療である「中医学」との間には様々な相違もあるが、理論体系においても構成生薬においても両者には共通点が多く、密接な関係があることは間違いない。明治以降の日本においては西洋医学偏重の時期もあったが、近年、高齢化の進展、予防医療への関心の高まりとともに、漢方などの東洋医学は見直されつつある。西洋医学と東洋医学を併用する医師も増えており、医学部、薬学部などでの漢方関連の教育の重要性も増している。

今回の調査では中国湖北省、重慶市、貴州省を訪れ、薬学部、薬用植物園における教育、研究に活かすべく、日本の漢方と深い関わりのある中国の生薬基原植物を、栽培地や自生地で観察することを目的とした。

２．神農架林区

神農架林区は中国湖北省西部に位置する自然保護区である。「神農」は古代中国の伝説上の皇帝で、医薬の神、農業の神、あるいは商売の神とも呼ばれる。手に持った鞭で草木を打って舐め、１日に７０回も中毒を起こしながら薬になるものを見出したという。「神農架」は、この神農が足場を設けて薬草を採ったとされる場所であり、天然の薬草園とも言われる。生薬に携わる者であれば、是非訪れてみたい場所の一つだと言える。

８月２２日、神農架林区を目指してバスで武漢を出発した。ところが、山間部に入り目的地に近づくにつれ、天候が悪化し、やがて大雨となった。予定のルートは土砂崩れで通行不能となり、迂回して進むことを試みたが、そのルートもまた通行不能であった。結局、その日は宜昌まで戻ることになった。翌朝の地元の新聞によると、２００年に一度の大雨が降り、各所で土砂崩れが発生し、死者も出ているということであった。道路復旧の見通しは立っておらず、神農架へ行くことは断念せざるを得なかった。非常に残念なことではあったが、中国における調査の難しさを印象づける出来事であった。（これ以後も、予定変更を余儀なくされることが何度かあった。）

３．黄連の畑

８月２４日、メタセコイアの自生地を視察するため、湖北省利川市の桂花、小河を訪れた。その際、イネやトウモロコシに混じって、黄連の畑が多数見られた（写真１～３）。

日本薬局方では生薬黄連は「オウレン *Coptis japonica*, *C. chinennsis*, *C. deltoidea*, または *C. teeta* の根をほとんど除いた根茎」と規定されている。黄連は成分としてアルカロイドの一種であるベルベリンを含む代表的な苦味健胃

写真 1.　黄連の畑

写真 2.　上から見た黄連の畑

写真 3.　栽培されている黄連

薬で、黄連解毒湯、三黄瀉心湯などの漢方処方に含まれる。

畑の形やサイズはまちまちであったが、１０m×２０mくらいのものが多かっただろうか。水田のように平坦な場所でも、やや傾斜のある場所でも栽培しているようだった。いかにも人力に頼って生産されているように感じられた。畑には人の背丈より低いくらいの木の柱が無数に立てられており、上部は木の枝を敷き詰めて日よけをつくっていた。主にスギ、コウヨウザンなど針葉樹の枝が使われているようだった。黄連は列状に、かなり密に植えられており、花は咲いていなかったが *Coptis chinensis* ではないかと思われる。

かつては日本国内でも丹波、越前、因州などで黄連が生産されており、戦前までは輸出もされていたが、外国産との価格競争に敗れ、国内の栽培農家は消えつつある。

この日は他にもいくつかの生薬基原植物を見ることができた。一つはシナホオノキ *Magnolia officinalis* の畑で、高さ３０cmから５０cmくらいの苗を育てるための畑のようだった（写真４、５）。トウモロコシの列の間に植えられているものもあった。日本薬局方ではホオノキ *M. obovata*, *M. officinalis*, または *M. officinalis* var. *biloba* を厚朴（コウボク）の基原植物として規定しており、その樹皮を乾燥させたものを生薬として半夏厚朴湯などの漢方処方に用いる。ホオノキを和厚朴、シナホオノキを唐厚朴として区別することもある。

他にもフジマメ *Dolichos lablab*（生薬名は扁豆ヘンズあるいは白扁豆ハクヘンズ）、や、フウ *Liquidambar formosana*（生薬名は路路通ロロツウ）なども栽培されていた。

４.五倍子

今回の調査では農村地帯を長時間にわたって移動することが多かったが、農家の家の前で農作物を天日で乾燥させている光景を毎日のように目にした。特に多かったのはトウモロコシとトウガラシで、他に豆類などもあったが、珍しいものとしては桂花で見た五倍子がある（写真６、７）。五倍子（ごばいし、ふし）はヌルデの葉にヌルデシロアブラムシが寄生してできる虫えい（虫こぶ）を生薬として用いるものである。タンニンを多く含み、腫れ物や歯痛に使われた他、皮なめし、染料、お歯黒に用いられた。日本でもヌルデの葉に五倍子ができているのをよく見かけるが、生薬として生産、加工される現場

写真 4.　シナホオノキの畑

写真 5.　シナホオノキ

写真 6.　五倍子の天日干し

写真 7.　五倍子

写真 8.　自生のヌルデ

写真 9.　薬店の人参

を見ることができたのは貴重な経験であった。

桂花周辺でも、他の場所でも自生と思われるヌルデ（写真８）は頻繁に目にしたが、「ヌルデの畑」と思われるようなものは見ていない。五倍子は自生のヌルデから採取しているのかもしれない。

5．重慶の薬店

８月２５日、重慶市で薬店に行くことができたので、人参（ニンジン）、白朮（ビャクジュツ）、呉茱萸（ゴシュユ）などいくつかの生薬を購入した（写真９）。この場合の人参はもちろんキャロットではなく、いわゆる朝鮮人参、オタネニンジン *Panax ginseng* である。紙に漢字で生薬名を書いて「ヨウメイヨウ　チェイガ？（これありますか？）」と聞き、あとは筆談と英語混じりのやりとりでなんとか買うことができた。白朮や呉茱萸は１００ｇあたり１０元（約１２０円）、人参はやや高く１０ｇあたり５．５元（約６６円）であった。ちなみに日本で人参を購入すると、例えば１００ｇで１万円（原型生薬、日本産）、あるいは５００ｇで１０９００円（刻み生薬、中国産）といった値段になる。生薬は品質によっても著しく価格が異なるので単純比較はできないが、重慶の薬店の人参は１００ｇでも１０００円に満たないので、かなり安い。

６．カンレンボクとキササゲ

８月２７日、重慶から貴州省へと移動した。貴州省では街路樹として植えられているカンレンボクやキササゲ（写真１０）が頻繁に観察された。いずれも薬用植物ではあるが、街路樹が薬用に利用されているかどうかはわからなかった。

カンレンボク *Camptotheca acuminata* はヌマミズキ科あるいはミズキ科に分類される落葉高木で原産地は雲南省である。喜樹（キジュ）とも呼ばれ、成分としてカンプトテシン camptothecin というアルカロイドを含む。抗がん剤のイリノテカン irinotecan は、このカンプトテシンの誘導体である。

写真 10.　街路樹のキササゲ

キササゲ *Catalpa ovata* の生薬名はキササゲあるいは梓実（シジツ）といい、漢方では細長い豆果のような果実を利尿薬として用いる。

７．まとめ

今回の調査では日本の生薬の主な輸入先である中国で、限られた時間ではあったが、生薬が生産される現場を目にするという機会を得た。黄連の畑などを実際に見て、日本における生薬生産の現状というものを改めて考えさせられた。

はじめに述べたように、日本国内の漢方への関心は高まっており、その原料となる生薬の需要も増えていくことが予想される。その一方、国内で消費される生薬の９割は輸入でまかなわれており、その大部分が中国からのものである。甘草（カンゾウ）のように漢方処方の７割に使われる重要な生薬でありながら、ほぼ１００％輸入に頼っているものもある。これに加えて、中国政府は資

源の枯渇や環境破壊などを理由に生薬の輸出規制をおこなっており、日本における生薬の安定供給は危機的な状況にある。国内での生産量を増やし、自給率を高めることが望ましいが、栽培方法の確立という技術的な面でも、採算性の面でも容易なことではない。

栽培方法の開発や、採算が取れるような仕組みづくりを続けることはもちろん必要であるが、そのためにも薬用植物園の立場で薬剤師（または薬剤師を目指す学生）を含む医療従事者に対して、あるいは広く社会に対して、生薬の安定供給がいかに危うい状態にあるかをアピールしていくことは重要なことだと再認識した。今回の調査で見聞したことが、薬学部におけるこれからの教育や薬用植物園の活動にわずかでも活かすことができればよいと思っている。

中国の編組製品について

小林和貴

竹籤などを編んだり組んだりして作製した容器のことを編組製品と言います。主なものには笊や籠などがあります。竹製の製品が一般的だと思いますが、民具では木本植物の木部や樹皮、蔓植物などを使ったものも知られています。しかし、最近ではプラスティック製や金属製の製品に取って代られて、編組製品を目にする機会はだんだん減ってきているように思います。今回の中国視察では、用途や編み方の異なる編組製品を多数目にすることができましたので、そのいくつかを報告します。

今回目にした編組製品のほとんどは、外見から判断する限りでは、タケ類の稈を縦に割り裂いた籤を編んで作られていました。なかには、ポリプロピレン製と思われるテープ状の素材が編みこまれたカラフルな編組製品も見られましたが、木本植物の木部や樹皮、蔓植物などを使ったものは目にすることはありませんでした。タケ類の加工性の良さや、入手の容易さが関係しているのかもしれません。

箕（写真 1）

竹籤をゴザ目に編んだ箕に、竹の稈が持ち手としてつけられています。すぐ脇に積まれた板状の瓦礫の運搬に使われたと考えられます。日本ではあまり見かけない形だと思いますが、今回視察で訪れた中国各地の建設現場で同じような形の編組成品をよく目にしました。

日本にも土砂などの運搬に使う手箕や砂利箕と呼ばれるものがありますが、太い竹籤で粗く編んだ箕の左右の縁に握り穴をあけたものが多く見られます。日本の民具ではタケ類のほかに、イタヤカエデ、サルナシ、ヤマフジの籤やヤマザクラの樹皮を編んだものや、サワグルミ、ヒノキ、ヤマザクラなどの樹皮や、スギ、ヒノキの薄板でつくった箕も知られています（岩井ほか 2008）。

写真 1. 箕（撮影地：湖北省利川市桂花村）

笊（写真 2, 3）

写真 2 と 3 は道端でトウガラシの乾燥に使われていた笊です。写真 2 は網代編みの円形の笊、写真 3 はゴザ目編みの片口の笊です。日本でも竹製の笊が多いですが、東北地方ではマタタビを素材とする米揚笊も知られています（岩井ほか 2008）。

背負籠（写真 4 - 7）

背負籠を目にする機会は、日本よりも多かったです。貴州省道真仡佬族苗族自治県では、朝の出勤時間にホテル前の通りを眺めていると、背負籠を背負った人を多く目にしました。農産物などの荷物だけでなく、子供を入れて背負っている人も多く目にしました（写真 4）。写真 5 の背負籠の体部の編み方は、麻の葉崩し編みのようにみえます。目の粗さは異なりますが、同様な編み方の背負籠を多く目にしました。写真 6 の体部の編み方は、上

写真 2. 円形の笊（撮影地：貴州省銅仁地区印江土家族苗族自治県梵浄山）

写真 3. 円形の笊（撮影地：貴州省銅仁地区印江土家族苗族自治県梵浄山）

写真 4. 背負籠（撮影地：貴州省道真仡佬族苗族自治県）

写真 5. 背負籠（撮影地：重慶市金佛山）

部がゴザ目、中部から下部にかけては二本とび八つ目編みにみえます。底部から体部の四隅には幅広の竹籤が編みこまれており、非常に頑丈そうです。

写真 7a の背負籠は細い竹籤で編まれており、水色と白色のカラーテープが編みこまれていたり、背負縄（写真 7b）も竹籤で編まれていたりと、前述の背負い籠とは趣を異にしています。体部はゴザ目編みで、背負籠の内側には細い竹籤が斜めに編みこまれています。

箕や笊と同様に、日本でも竹製の背負籠が多いですが、民具ではイタヤカエデなどの木本や、マタタビ、フジ、アケビ、ヤマブドウなどの蔓、マコモ、スゲ、イグサな

写真 6. 背負籠（撮影地：重慶市金佛山）

写真 7. 背負籠（撮影地：貴州省銅仁地区印江土家族苗族自治県梵浄山登り口)。左 7a、右 7b

写真 8. 籠（撮影地：重慶市南山植物園）

写真 9.　籠（撮影地：貴州省銅仁地区印江土家族苗族自治県梵浄山）

写真 10.　籠（撮影地：貴州省銅仁地区印江土家族苗族自治県梵浄山登り口）

写真 11.　籠（撮影地:貴州省道真仡佬族苗族自治県）

どの草本で編まれたものも知られています（岩井ほか2008）。

写真 12. 籠（撮影地：重慶市金佛山）

籠（図 8-12）

写真 8 は、針金の提げ手がついた小形の籠です。底部は二本一組の竹籤で目の粗い四つ目に編まれています。目を塞ぐようにあとから幅広の竹籤が追加されているようです。側面の編み方は、写真 5 の背負籠と同じ麻の葉崩し編みのようです。写真 9 は、日本で言うところの目籠に似ています。竹籤で目の粗い六つ目に編まれており、一部針金で編まれています。写真 10 は同形の籠を天秤棒の前後に吊るして、荷物を運搬しています。これらの籠の体部の編み方も、麻の葉崩し編みのようです。写真 11 は屑籠です。こちらの体部の編み方は、上部がゴザ目編みで、中部から下部にかけては麻の葉崩し編みのように見えます。写真 12 はナツメ売りの籠です。体部はゴザ目編みで、体部の四隅には幅広な竹籤が編みこまれています。

引用文献：　岩井宏實（監修）・工藤員功（編）・中林啓治（画）（2008）民具の事典，河出書房新社.

観賞の立場から、武漢・重慶植物園で見た盆景と日本産樹木の展示について

加藤昌一

1. はじめに

海外では盆栽の人気が高く、ことに北アメリカ、ヨーロッパ各国での評価は年々高まりつつあります。海外の植物園を訪問した機会にも盆栽に出会うことがあり、その傾向は増しているように思われます。そこで、このたびの海外調査隊は、訪問予定のなかに武漢植物園などが組まれ、中国の盆栽（盆景）を見学できるよい機会と考え、参加をお願いした次第です。本稿では盆栽（盆景）を観賞する立場からレポートといたします。また、併せて訪問する植物園内で展示されているなかに日本産樹木があるかどうかに注目したいと考えていました。

2. 植物園での盆栽の展示について

このレポートを書き起こす動機のひとつは、アメリカやイギリスの植物園で、盆栽の展示が盛なことです。すでに「ＢＯＮＳＡＩ」ということばは英語として認められ、世界語として流通する時代です。

盆栽の展示でよく知られている植物園はアメリカ合衆国の国立樹木園盆栽展示場です。これは今から約 36 年まえに、当時の園長ジョン・クリーチ氏の要請にそって日本盆栽協会のとりまとめで、国立樹木園に寄付された盆栽 53 点、水石 3 点の名品からスタートとなったものです。その後、アメリカ産の樹種をふくめて創作されたアメリカの盆栽を中心とした展示場、中国の盆景の展示場が増設されたようです。これらの作品は、ホワイトハウスで催される行事の会場に運び、飾ることが目的のひとつであると聞いています。アメリカでは他の複数の植物園でもＢＯＮＳＡＩを主要な展示に加えています。

日本植物園協会が 2007 年 9 月に行ったイギリス事情調査で訪問した、ウィズレーガーデン、キューガーデンでは、日本庭園内に盆栽を屋外展示していました。後者ではそれとは別に盆栽の展示棟があり、現地の盆栽家が創作したものを含めて、よい 作品が展示されていました。日本では、まとまった数の盆栽を常設展示している国公立の博物館施設（植物園を含む）としては、国営昭和公園（東京都）内の盆栽苑、近年開館したさいたま市大宮盆栽美術館ほかが知られていますが、植物園ではまだ本格的な盆栽展示施設が見当たらないのは残念です。これらを考え合わせると、植物園の展示のなかに植物観賞を目的に、盆栽の展示があってもよいのではないかと思います。盆栽は日本の植物文化です。盆栽の創作、管理、展示の技術を公的な場面で保持し続けるために、植物園

が果たす役割は大切ではないでしょうか。

本稿では用語としての盆栽と盆景の用法を使い分け、仮に盆栽は日本などの作品、盆景は中国の作品を示すことにします。また以下の写真説明は日本での盆栽の一般的解説にならって樹種、樹形、鉢、樹高を記しました。コメントは思いつきで印象を付しました。

＊アメリカ合衆国国立樹木園 http://www.usna.usda.gov
＊さいたま市大宮盆栽美術館 http://www.bonsai-art-museum.jp

3. 武漢植物園の盆景

今回の調査では、はじめに武漢植物園を訪ねました。中国三大植物園の一つといわれ、湖北省らしく水生植物を中心に保護、調査研究、開発、展示を行っている園です。ハス園、スイレン園、水中植物の展示には見ごたえがありました。

しかし、盆景には期待するものは見つからず、園内の飾りのポイントとして置かれた鉢植えに出会ったくらいでしょうか。その後、植物園を出てごく近くで、昼食のために大規模な水上レストラン（酔香隆）に入ることになりました。バスを降りて、庭の通路を右に折れ、左に折れして個室に案内されたわけですが、その通路の脇に多数の盆景が店内の装飾として置かれていました。

さまざまなタイプの盆景が並べられており、第一印象では中国的な味をもった作品でしたが、なかには少数ながら日本の盆栽的な趣の作品がありました。しかし、率直にいって手入れの不足がめだちました。いろいろなタイプの盆景がありましたので、便宜的にタイプ別グループ分けして以下に写真を示します。

写真 1.　武漢植物園正門

＊作品の説明項目について

・樹種―筆者が判明できる範囲で和名を付した。樹種名は、名札が付いている作品は中国名・学名を、または資料を参考にした。和名が判明しない場合は、疑問符？を、または中国名のみを（カッコ）内に表記した。

・樹形―あえて盆栽的な名称とした。盆景には独自の名称がある。

・鉢―植物体を支える容器を意味し、鉢の窯名は省略した。

・樹高―本来は計測した数値が必要。ここでは目測で高さ 50cm 以下を小型、高さ 50~100cm を中型、高さ 100~150cmを大型、それ以上高さを超大型とした。

○Ａグループ：日本の盆栽のように鉢（移動可能な容器）に植え込んだ作品（A-1 ～ A-5）

作品 A-1. 樹種・イヌマキ（羅漢松）、樹形・模様木、鉢・正方型、高さ・中型。まだ木が若く、樹形が整っていない。

作品 A-2. 樹種・イボタノキ ?、樹形・模様木、寄せ植え、鉢・長方、高さ・中型。それなりに古い株で、幹に味が出つつある。2 株植えに見えるが、盆栽的ではない。

作品 A-3. 樹種・イボタノキ？、樹形・模様木、鉢・長方、高さ・中型。場所がら水車に添えた展示がアイデア。

作品 A-5. 樹種・ボケ (貼梗海棠) ?、樹形・ハクチョウゲでつくられる中国の伝統的な樹形。鉢・丸、高さ・中型。若木のころに幹を曲げて模様を付けたものか。盆景流派の一つ川派（四川省成都）の独特の作品。

作品 A-4. 樹種・パキラ（瓜栗）？、樹形・寄せ植え、鉢・丸、高さ・中型。若木の株をひとまとめにして植えたものか。長年、鉢で育てた株であるが、盆景かどうか。

○ B グループ：仕立てた株を大石やコンクリート構造物に移したと思われる作品（B-1、B-2）

作品 B-1. 樹種・イボタノキ？、樹形・模様木、鉢・石を鉢に見立てて株の周囲に配したもの（中国的な名称があると思われる）、高さ・中型。このままでは移動できないので盆栽的ではない。中国の庭づくりの技法の一つか。

作品 B-2. 樹種・?（榧樹）、樹形・模様木、鉢・公園にコンクリートで造った丸鉢型の構造物、高さ・超大型。武漢市内の公園で見かけた作品。樹は大型の模様木でよい形に仕上がっている。日本では庭木の大きさ。

○ C グループ：鉢で仕立てた株を地植えにしたと思われる作品（C-1、C-2）

作品 C-1 樹種・イボタノキ？、樹形・模様木、鉢・長方、高さ・中型。山採りの素材を長年鉢で育てた作品と思われる。鉢植えを地面に埋めた理由は管理の都合かどうか、取材できなかった。

作品 C-2. 樹種・イボタノキ？、樹形・模様木、鉢・鉢はなく、地植えのように見える、高さ・大型。日本では庭木の大きさ。山採りの素材を大型な鉢のような構造物で仕立てたと思われる。幹は古木らしい味わいと力強さがある。

○ D グループ：穴の多い岩石に木や草の株を植えた作品（D-1）

作品 D-1 樹種・？草ものか、樹形・石付け、石・石灰岩か、高さ・大型。中国の庭園では奇岩、奇石が配置されることが多いが、これはその石に植物を配したものか。

4. 重慶市南山植物園の盆景

調査行の第 7 日目に、重慶市南山植物園に訪ねました。重慶は揚子江（長江）の湾曲した川の両岸周辺に発展した、山地に囲まれた大都市です。夏は暑く、市街地の南側に、避暑ができるほどの高さの南山があります。市街地から車で急坂を上がることができ、蒋介石の別荘があった高級住宅地をすぎたエリアに南山植物園があります。市民の保養の場にもなっています。

写真 2. 重慶市南山植物園正門の門柱。

南山植物園内は高低差のある地形を生かしてサクラ園、ツバキ園、ラン園、ウメ園、盆景園、温室エリアに分けて展示され、娯楽施設も付設されています。

立派な門から入る盆景園は、植物園の中心的な展示場で、斜面を活用して庭園風に設計され、庭園自体が盆景的雰囲気をもっています。広さは約 3,000 坪、盆景の作品に合わせて池や橋、広場が配置されています。植物園には珍しく盆景園内にホテル（「盆景園賓館」）が併設されています。展示されている盆景の作品は完成度が高い作品もあります。いくつかの流派の作品があると説明書

きしてありました。しかし、全体的には手入れが十分ではないように見えました。

前項と同じく作品を A~C グループに分けて説明します。

写真 3. 盆景園正面と、写真 4. 盆景園表札。

写真 5. 池に沿った展示場。

○ A グループ：日本の盆栽のように鉢（移動可能な容器）に植え込んだ作品（A-6 ～ A-14）

作品 A-6. 樹種・イスノキ？（中華蚊母樹）、樹形・模様木、鉢・長方、樹高・大型。幹、枝ぶり、鉢との調和など仕上がりがよく、日本的盆栽に近い。

作品 A-7. 樹種・イボタノキ？、樹形・模様木、鉢・長方、樹高・中型。盆栽としても完成度が高い作品。

作品 A-8. 樹種・？、樹形・石付け、鉢・平鉢、樹高・小型。平鉢に砂を敷いて植物を付けた石を置き、自然景観を表現。盆景の手法のひとつ。

作品 A-9. 樹種・ツツジ < サツキ >、樹形・双幹、鉢・長方、樹高・大型。日本のサツキ盆栽に似ている。根張り、枝配りがよい。

作品 A-10. 樹種・ツツジ < サツキ >、樹形・斜幹、鉢・長方、樹高・中型。斜幹に合わせた右よりの植え位置であるが、右によりに過ぎか。盆景的な樹形と思われる。

作品 A-12. 樹種・ギョリュウ（檉柳）、樹形・双幹、鉢・正方形、樹高・中型。竹の支柱が添えられていて盆栽的にはまだ仕上がっていない。涼しさを感じさせる作品。

作品 A-11. 樹種・ツツジ < サツキ >、樹形・模様木、鉢・正方、樹高・中型。樹形は盆景的か。樹形に合わせた深鉢を選んでいる。

作品 A-13. 樹種・サルスベリ（紫薇）、樹形・模様木、鉢・長方、樹高・小型。見学した日に開花していたので取り上げた。古い株である。

作品 A-14. 樹種・イヌマキ（羅漢松）、樹形・模様木、鉢・八角鉢、樹高・超大型。同じ樹形で大きさをそろえた数鉢を、庭に列に並らべて飾ることもある。

○ B グループ：仕立てた株を大石やコンクリート構造物に移したと思われる作品（B-3）

作品 B-3. 樹種・イヌマキ（羅漢松）、樹形・寄せ植え、石・花崗岩か、樹高・超大型。大型ではあるが、全体として調和がとれた寄せ植えで、盆栽的な味がある。

○ C グループ：この盆景園では保護のため地植えしていると思われる

写真 6. 盆景園内に「保護樹」と書かれた札の付いた株が多数あった。本来は容器に植えられていた株を保護のために地植えにしたのか。目的は取材できなかった。

作品 C-3. 樹種・イチョウ（銀杏）、樹形・模様木、鉢・地植え、樹高・大型。盆樹を保護するためか、地植えで庭木として景観をつくっている。

作品 C-4. 樹種・？（鳥柿）、樹形・直幹、鉢・地植え、樹高・大型。C-3 と同じ。

作品 C-5. 樹種・ハクモクレン（白玉蘭、玉蘭）、樹形・斜幹（模様木）、鉢・地植え、樹高・大型。C-3 と同じ。

写真 7. 石の壁面に書かれた南山盆景賦の説明図。古い流派の作品。

写真 8. 盆景園内にあるホテルの案内板。

写真 8. 南山植物園近くで営業する市内の盆景園。日本の盆栽に近い作品が陳列されていた。昨年、中国で開催された世界盆栽水石大会に出品した鉢があるとか。

＊参考資料：塚本洋太郎総監修『園芸植物大辞典』(1994) 小学館。
＊作品の説明項目につての注意は「1. 武漢植物園の盆景」文末を参照。

5. 盆景と盆栽の簡単な説明

世界に広まっている BONSAI は日本語の盆栽（ボンサイ）とほぼ同じ発音のようです。盆景の英訳は BONSAI（ボンサイ）です。

○盆景の始まりと流れ（中国）

最近の中国での調査では、盆景の起源は章太子李賢墓（唐代、706 年）の壁画とされています。盆景は唐代から始まり、五代、宋代、元代、明代、清代の文献にその姿をたどることができるといいます。各地ごとに特性を持った盆景がつくられ、地方ごとに蘇派（蘇州）、揚派（揚州、泰州）、通派（江蘇省南通）、川派（四川省成都）、徽派（安徽省）、海派（上海）、嶺南派（広東、広西、福建）といった流派が生まれ、その作品は伝統的盆景になったといえます。

新中国になり、政府などが盆景の大衆化のために、公共の盆景園の創設を進め、優秀な盆景技術者とよい作品を集め、創作・保護・展示を行うようになったようです。盆景の種類には、樹木盆景と、山水盆景があります。前者は樹木を主な素材とし、幹、材、根に手をかけて、古樹の姿づくりを中心に、天地自然の表現をめざします。後者は浅盆に石を主にして草木を配置し、山水の景を創作します。創作にあたっては景名（題名、作品のねらい）を大切にします。樹形は幹の形状、その数によっていろいろ分類され、代表的なものでも 10 種あるそうです。樹高は特大型、大型、中型、小型、微型があり、特大型は建造物の内外や庭園に飾られます。樹形の型は日本の盆栽より多いようですが、共通するものもあります（名称は異なる）。

＊中国では各地に盆景園が整備され、盆景作品の展示では上海植物園 (盆景園は 1978 年に完成) などの盆景園が知られている。
＊上海植物園　http://bokupapa.cocolog-nifty.com/blog/2007/10/post_27.html

○盆栽について（日本）

日本では絵巻物『春日権現験記』（700~800 年前）にはじめて現れています。その後盆栽の呼称は、樹形や種類など中国の文物から影響をさまざまに受けていたようです。

明治 20 年代になって煎茶道の影響を受けて、盆栽愛好家や盆栽業者は樹木と石で自然の縮景を表現する鉢植えを「盆栽」と呼ぶようになり、現在にいたっています。昭和 9 年 3 月に第 1 回国風盆栽展（主催・国風盆栽会、会場・現在の東京都美術館）が開かれ、本年で第 86 回を迎えました。

その間に民間の組織と個人経営の盆栽店（盆栽作家）、愛好家などが主体となって現代の盆栽文化を発展させてきました。

中国のように歴史的な流派はなく、盆栽作家として個人が作品を創作してきました。盆栽の分野は樹木盆栽、草物盆栽、水石、小品盆栽に分けることができます。主流の樹木盆栽の樹形（型）は直幹、模様木、斜幹、双幹、文人木、根連なり、寄せ植えなどがあます。鉢は主に日本の焼き物を使いますが、古渡りと称して植物との調和のよい中国･宜興産の古い鉢（紫泥）が珍重されています。盆栽には中国の盆景にある景名を強調することはないようです。ただし、名品には銘をつけることはあります。観賞は室内と庭で行うため、屋外の栽培場から移動でき

る大きさ（重さ）の作品が主流となっています。日本では樹高 100cm を超えると盆栽かどうか議論になります。現代では、機会を選んで（社）日本盆栽協会が中心となってアメリカ、ヨーロッパ、アジア各国に講師を派遣し、技法の実演を行い、技術指導にあたり、各国での盆栽の普及活動が進められています。さらに同協会などが提案した世界盆栽大会が実現し、現在では定期的に各国で開催されるようになりました。

＊参考資料　丸島秀夫、胡運驊編著『中国盆景の世界①盆景』(2000) 農文協

7. まとめ

自然発生的に鉢植えから盆栽的な作品が、歴史的には日本の各地で育成されてきたと思われます。現在のような観賞の対象とした近代の盆栽は昭和 9 年にスタートした国風盆栽展が大きな役割を果たしたのではないでしょうか。そして現在は世界各国に愛好者が出現し、毎年早春に開催される国風盆栽展（日本盆栽協会主催）には、外国からの熱心な盆栽ファンが来場しています。伝統を生かした創作技術と細心の注意をはらった培養管理が施された、日本の盆栽は自然の縮景を表現し、芸術ともいえる作品となって観賞する人に感動を与えます。

盆栽は盆器に配した植物の風情を観賞するので、樹木は山採りの古い素材が珍重された時代がありましたが、現代では変わりました。古くからある名品盆栽などは別としても、現代の日本では、多くは種木（たねぎ）は実生、さし木、取り木などの技術で繁殖され、若木から技術を施して盆栽に仕立てられています。

写真 11. サトザクラ（日本晩桜）。重慶市南山植物園、サクラ並木にて。

日本の各地には長年の経験を積んだ盆栽家や盆栽愛好者がおられます。それぞれに伝統的な技術から、特徴を持った作品がつくりだされています。小生のふるさと愛知県三河地方では、クロマツの盆栽の産地として有名で、子供のころから農家の庭でよく見かけました。ベテランの盆栽作家が創作した盆栽には、それこそ「生きている芸術」を感じさせる力があります。

結論として、日本産の植物を観賞する本格的な BONSAI の科学的研究、展示、保存、教育の活動を目指す日本の植物園が生まれることを期待したいと考えます。

8. 補記

今回の調査隊に参加を申し込みましたところ、日本植物園協会から報告テーマの提出要請があり、「中国の盆栽（盆景）と日本産樹木の探索」と返事した都合上、調査の植物園で出会った若干の日本産樹木と思われる写真を無作為に選んで貼付します。

写真 10. シマサルナシ（山梨獼猴桃）。武漢植物園、姜（JIANG）正旺先生の研究園にて。

写真 12. クロマツ（黒松）。クロマツは日本では主要な盆栽の樹種。

平成 23 年度海外事情調査報告書 – 中国　湖北省・重慶市・貴州省（2011 年 8 月）–
® 社団法人　日本植物園協会